

財團法人八尾市文化財調査研究会報告76

- I 跡 部 遺 跡 (第32次調査)
- II 楽音寺・大竹西遺跡 (第2次調査)
- III 木 の 本 遺 跡 (第10次調査)
- IV 久 宝 寺 遺 跡 (第44次調査)
- V 久 宝 寺 遺 跡 (第45次調査)

2003年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



八尾市文化財調査研究会報告76

- I 跡 部 遺 跡 (第32次調査)
- II 楽音寺・大竹西遺跡 (第2次調査)
- III 木 の 本 遺 跡 (第10次調査)
- IV 久 宝 寺 遺 跡 (第44次調査)
- V 久 宝 寺 遺 跡 (第45次調査)

2003年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は西に上町台地、東に生駒山西麓の景観をみる河内平野のほぼ中央部に位置します。本市には恩智遺跡や八尾南遺跡をはじめ、旧石器時代以降から祖先が大地に刻んできた文化遺産が数多く残されています。

しかし、その貴重な文化遺産が急激な都市化の進展によって破壊され、日々どこかで消滅しているのも周知の事実です。こういった状況のなか、財団法人八尾市文化財調査研究会は、調査・研究を通じて明らかとなった文化遺産を後世に伝えていくことが課せられた責務と考えています。財団法人八尾市文化財調査研究会は昭和57年7月に発足して本年で21年目となり、今まで数多くの市内遺跡の発掘調査を実施し、その成果を遺跡ごとに報告書として刊行してまいりました。

この度、平成13年度および平成14年度に実施した公共事業に伴う5件の調査の整理が完了しましたので、これらをまとめ報告書として刊行する運びとなりました。

本書がこういった発掘調査成果を通じ、地域史解明、さらには埋蔵文化財を再認識する資料として広く活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の開始当初から本報告書の刊行にいたるまで、数々のご尽力を頂きました関係各位の皆様方に心より御礼申し上げるとともに、今後尚一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年6月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成13年度および平成14年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成15年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の日次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・IVが岡田清一、IIが高萩千秋、IIIが西村公助、Vが成海佳子で、全体の構成・編集は岡田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成13年度版）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北（国土座標第VI系）を示している。
1. 遺構は下記の略号で示した。

堅穴住居	- S I	掘立柱建物	- S B	井戸	- S E	土坑	- S K	溝	- S D
柱穴	- S P	落ち込み	- S O	土器集積	- S W	自然河川	- N R	不明遺構	- S X
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。

弥生土器	・土師器	・瓦器	・埴輪	・石製品	・白	・須恵器	・陶磁器	・黒	・木製品	・鉄製品	・斜線
------	------	-----	-----	------	----	------	------	----	------	------	-----
1. 土色については『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライドを、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

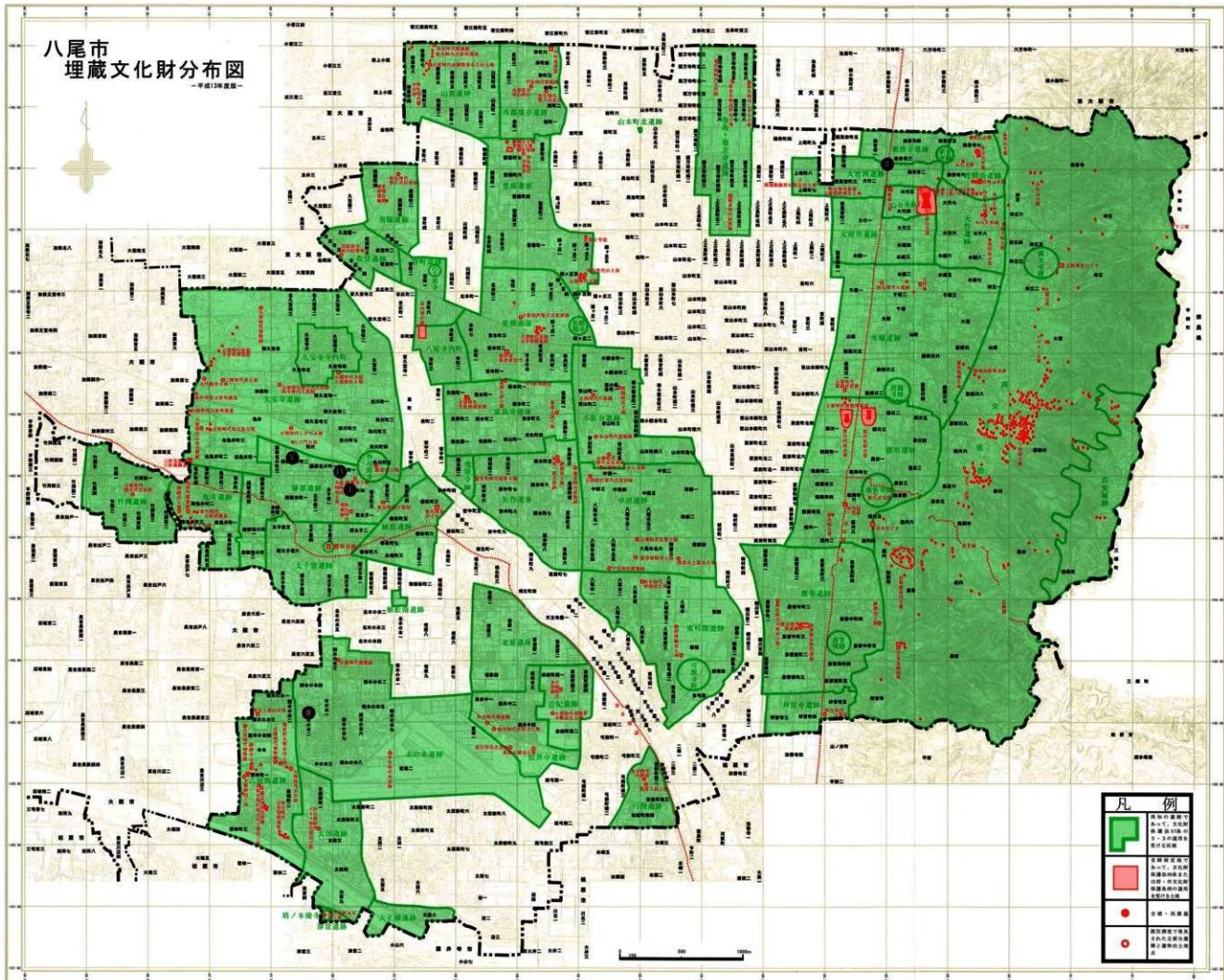
はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 跡部 遺跡 第32次調査 (A T2001-32)	1
II 乗音寺・大竹西遺跡 第2次調査 (G O2001-2)	23
III 木の本遺跡 第10次調査 (S K2002-10)	31
IV 久宝寺遺跡 第44次調査 (K H2002-44)	45
V 久宝寺遺跡 第45次調査 (K H2002-45)	51
報告書抄録	

八尾市 埋蔵文化財分布図



I 跡部遺跡第32次調査（A T 2001-32）

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市春日町4丁目13番地(春日公園内)で実施した防火水槽建設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査で報告する跡部遺跡第32次調査(AT2001-32)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第107号 平成13年6月6日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成13年12月20日～平成14年1月31日(実働14日間)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約73m²を測る。なお、調査においては飯塚直世・岩本順子・澤村妙子・都築聰子・實樹婦美子・横山妙子が参加した。
1. 本文の執筆・編集は岡田が行った。なお、石器遺物の実測およびトレースについては金親満夫(当研究会嘱託)の協力を得た。

本 文 目 次

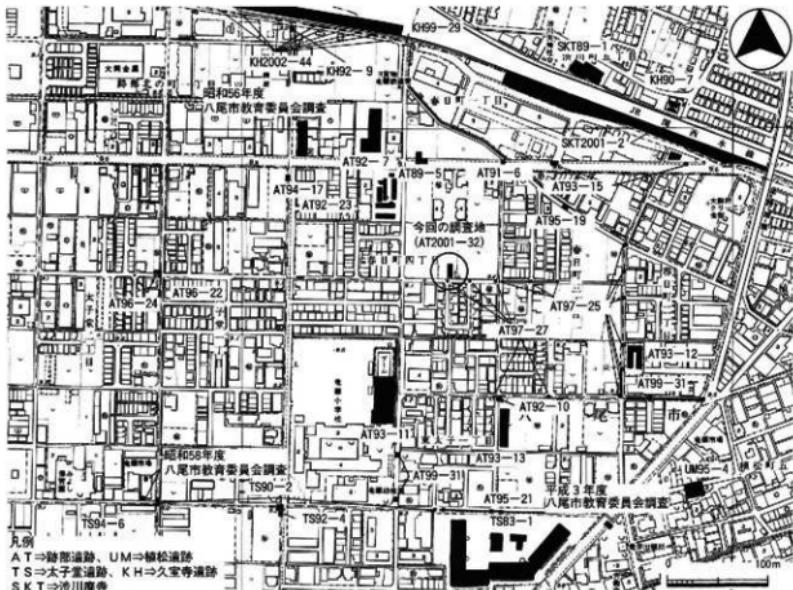
1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	2
1) 調査の方法と経過.....	2
2) 基本層序.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	5
3.まとめ.....	14

I 跡部遺跡第32次調査(A T 2001-32)

1. はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に位置し、現在の行政区画では跡部北の町1～3丁目、跡部本町1～4丁目、跡部南の町1・2丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、安中町3丁目に広がる概ね南北0.5km・東西1.3kmを測るものと推定される。地理的には、旧大和川の主流である長瀬川左岸の自然堤防上に立地し、周辺には、北に久宝寺遺跡、東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に亀井遺跡が隣接している。

本遺跡は、昭和53年に春日町1丁目における旧国鉄職員寮建設工事の際に、弥生時代前期の土器や鎌倉時代の瓦が出土したことによって認知された。その後昭和56年以降は、八尾市教育委員会、当研究会によって下水道工事をはじめ、共同住宅建設工事等に伴う数多くの調査が実施されている。今回の調査地周辺で実施された調査の成果をみると、北約100m地点で実施された第5次調査では、弥生時代後期以前に埋納された銅鐸が見つかっている(安井・成海1991)。この調査によって山間部のみならず、低平地上にも銅鐸が埋納されていることが明らかとなった。その銅鐸出土地点の南西部にあたる第23次調査では、弥生時代後期～古墳時代前期まで居住域が検出され、多量の土器とともに銅鏡が出土している(原田1996)。また、本調査地の南側の市道では、公



第1図 調査地位置および周辺図(S=1/5000)

共下水道工事に伴う第27次調査において弥生時代前期～中期に至る比較的厚い堆積層が確認されており、当地が該期の集落の中心であったことが推察されている（坪田1999）。こういった調査成果から、当地一帯は弥生時代前期～古墳時代前期にかけて集落が営まれるのに適した土地条件であったことが窺える。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

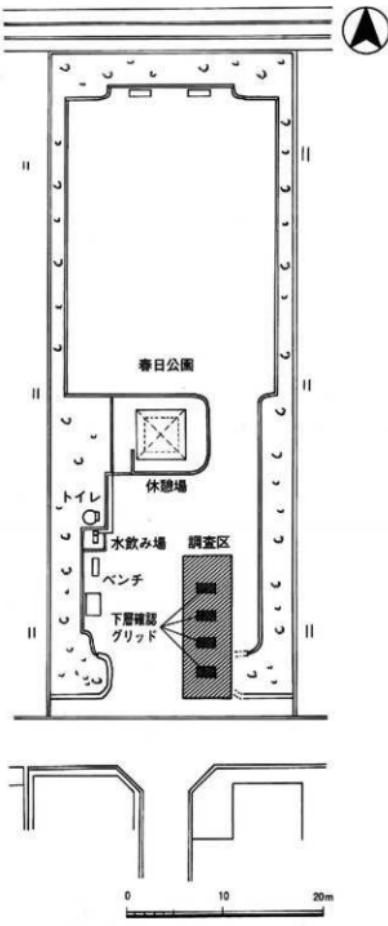
今回の発掘調査は、春日公園内における防火水槽建設工事に伴うもので、当研究会が本遺跡内で実施した第32次調査にあたる。調査対象は水槽埋設部分で、平面が南北14.6m×東西5.0mの面積約73m²を測る。掘削はまず、公園造成時の盛土および近・現代の作土層、そして現代の作土が形成される以前の溜め池埋め戻し土で構成される現地表下2m前後迄の堆積層を重機掘削した。以下、周辺における既往の調査成果を参考に重機掘削終了面から約1.0m迄を人力によって掘削・精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。調査が終盤に差し掛かった頃、調査区南部において当初予定していた深度よりもさらに深いところに弥生時代中期の堆積層と遺構面が存在していることが判明した。そこで、事業者および八尾市教育委員会と協議の上、2日間の期間延長し、平面的な調査を実施した。なお、調査終了後は調査区内に南北約1m×東西約2mのグリッド4箇所を設け、さらに工事が及ぶ深度まで、下層確認調査を実施した。出土遺物量は全体でコンテナ4箱分である。

2) 基本層序

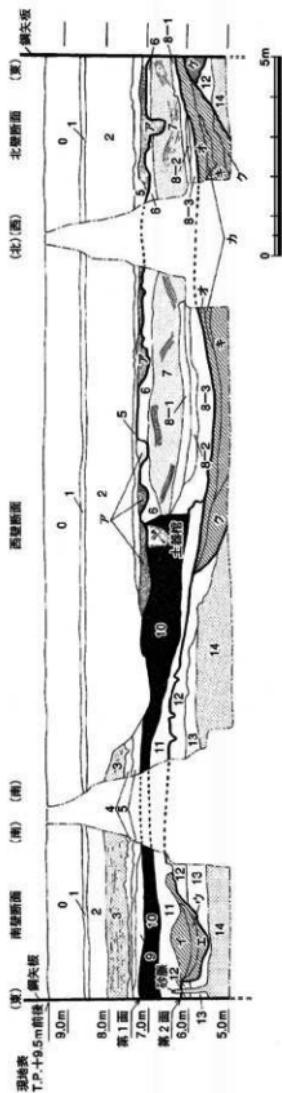
調査区の基本的な層序は以下のとおりで、地層断面の詳細については南・西・北壁の模式図を第3図に掲載した。

第0層：盛土。層厚は90cm前後。公園造成に伴うものである。

第1層：作土。層厚は15cm前後。公園形成以前の現代の作土層である。現存する付近の耕作地表面とレベル高が一致する。



第2図 調査区位置図 (S=1/500)



【遺構】 墓上（公認遺産に伴う）

高0層：H22/1緑色シルト（礫の作土）

高1層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高2層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高3層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高4層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高5層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高6層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高7層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高8層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高9層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高10層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高11層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高12層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高13層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

高14層：H22/1褐色粘土質土（漂砂の堆積物）

【遺構】 には遺構と推定される遺土

〈古墳時代中期後半土器〉

S K (201)

（共生時代中期後半 S K (201)

イーNS/2/オーブ黒色粘土質シルト

エー-56/2/オーブ黒色粘土質シルトとS82/2青黑色粘土質シルト

（共生時代中期後半 遺構？）

イー-7,5/RA/4緑色シルト、カ-7,5/RA/4緑色粘土質シルト

オ-7,5/RA/4緑色シルト、カ-7,5/RA/4緑色粘土質シルト

ケ-2,9/7/3/オーブ青色粘土質シルト

第3図 地層断面図 (S=1/120)

- 第2層：産業廃棄物層。層厚40～100cm。泥炭層と大量の産業廃棄物によって構成される。第1層の作土が形成される以前に灌漑用として掘られた近現代の溜め池埋め戻し土である。調査区の南端部から南側の市道にかかる付近が池の南岸であることは、調査区内に設けた西壁断面から見てとれる。また、岸から掘り下がった池床には護岸施設と見られる横板および杭の一部が残存していた。
- 第3層：5B7/1明青灰色細粒砂～極細粒砂。層厚50cm前後。調査区の南端部にのみ存在し、他は溜め池形成時に削平されたものと思われる。周辺における既往の調査から、古墳時代中期以降の河川堆積層と推定される。細粒の水平なラミナが観察される。
- 第4層：N6/0灰色粘土質シルト。層厚5～20cm。古墳時代前期前半(布留式期古相)の遺物を含む。第3層と同様、調査区の南端部のみ存在し、大部分は溜め池形成時に削平されたものと思われる。
- 第5層：N3/0暗灰色砂礫混じり粘土質シルト。層厚5～20cm。古墳時代前期前半(布留式期古相)の遺物を含む。調査区北半部では、微細な炭化物ラミナが見られる。
- 第6層：7.5Y7/3オリーブ黄色粘土質シルト。層厚10～50cm。調査区北半部に存在する。本層上面(T.P.+7.2m前後)において、古墳時代前期前半(布留式期古相)の遺構を検出した。
- 第7層：N6/0灰～N7/0灰白色極細粒砂。層厚20～80cm。調査区北半部に存在する。地層の相対的な先後関係から、古墳時代前期前半(布留式期古相)以前の河川堆積層と推定される。灰色極細粒砂のラミナが見られた。
- 第8層：10YR4/2灰黃褐色～10YR3/3暗褐色の粘土質シルト。層厚10～70cm。自然流木片や植物遺体を多量に含む。3～4層に細分が可能で、上層の一部は滞水状態を示す砂質シルト、下部は淘汰不良の粘土質シルトである。
- 第9層：5B3/1暗青灰色シルト。層厚は最大で20cm前後。調査区の南半部にのみ存在する。弥生時代中期末の遺物が含まれる。本層は、下層の第10層も含め、少量の弥生前期の遺物が混在すること、径5cm前後のブロック状の土塊が含まれていること等から勘案して、人为的に形成された墳丘盛土である可能性が高い。
- 第10層：5B2/1暗青黑色砂礫混じりシルト。弥生時代中期前半の遺物が主であるが、前期の破片が若干含まれる。本層も第9層と同様、調査区の南半部にのみ存在するもので、墳丘に伴う人为的な盛土であることが推察される。層厚については、調査区南端部では20～30cm程であるが、中央部付近になると、100cm前後の厚みを有する。西壁中央の本層内から土器棺を検出した。
- 第11層：N3/0暗灰色粘土質シルト。層厚10～50cm。本層は上層における弥生時代中期後半の墳丘形成の際に削平されたものか調査区南半部にしか存在しないが、調査区北部では弥生時代中期の遺構内埋土の可能性があるオーケの5層(第3図)を壁断面で確認している。
- 第12層：5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルト。層厚は、最大で30cmを測る。本層の上面(T.P.+6.5m前後)で、弥生時代前期に比定される土坑1基(SK201)と砂脈(地盤痕)を検出した。
- 第13層：5B5/1青灰色シルトとN7/0灰白色極細粒砂の互層から成る水成層である。層厚20～50cm。
- 第14層：N7/0灰白色極細粒砂～細粒砂。層厚70cm以上。調査区全域に分布する弥生時代前期以前の河川堆積層と思われる。

3) 検出遺構と出土遺物

【第1面<古墳時代前期>】

現地表下2.3m前後(T.P.+7.2m前後)を測る北部では第6層、南部では第9・10層の各上面において古墳時代前期前半(布留式期古相)の遺構を検出した。遺構は、土坑3基(SK101~103)、溝6条(SD101~106)、柱穴1個(SP101)である。以下、各遺構毎に記述する。

土坑(SK)

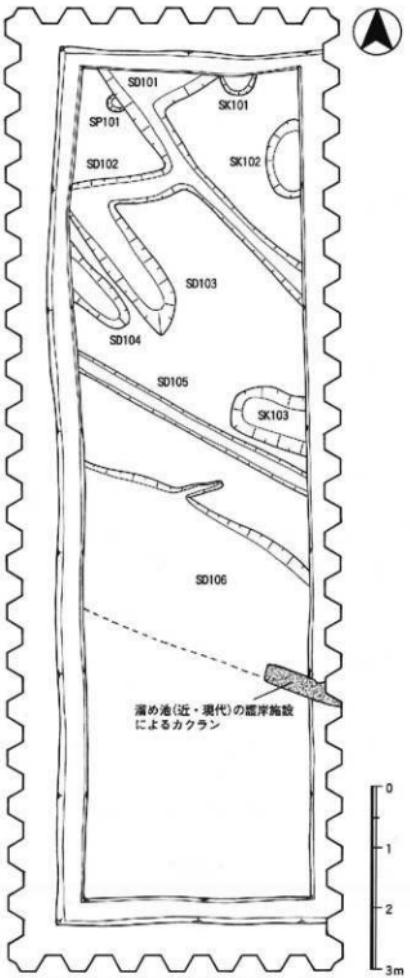
SK101

調査区北端部で検出した。北部は側溝掘削の際に削平してしまったが、北壁面観察の結果、西側のSD101によって削平されていることが判明した。検出規模は、最大径0.62m、深さ0.05mを測る。埋土は5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトの単一層で、炭化物が混入する。遺物は古式土師器の小破片が数点出土した。

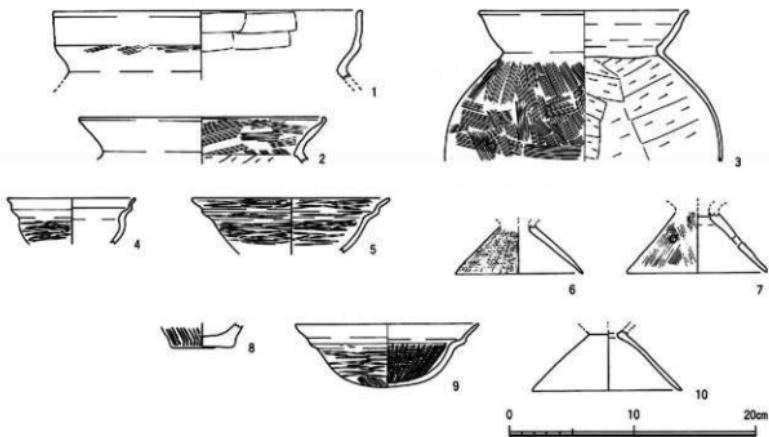
SK102

SK101の南東側で検出した。東部は側溝掘削の際に削平してしまった為、全容は不明である。検出規模は、最大径1.25m、深さ0.22mを測る。埋土は、上層—5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトに炭化物と焼土が混入、下層—5GY2/1オリーブ黒色シルトに細粒砂の偽縛が見られる。遺物は上層から古式土師器の壺・甕・鉢・器台が出土した。そのなかで図化できたものは、壺(1)・甕(2・3)・有段鉢(4・5)・小型器台(6・7)の7点である。

1は複合口縁を有する壺で、体部から短く屈曲した後、直立する口縁部を呈する。2は庄内式甕で、口縁部がやや外反して伸びた後、端部を擒み上げる。3は布留式に属すると思われる甕で、口縁部はやや内彎し、端部は外側に擒み出す。4は体部外面に、5は内外面全域に横方向の緻密なヘラミガキが施されている。6・7はいずれも円錐形の脚台部を呈する。7には円孔が3方向に配される。



第4図 第1面 遺構平面図(S=1/80)



第5図 SK 102(1~7)およびSD 103(8~10)出土遺物実測図(S=1/4)

SK 103

調査区やや中央寄りの東部で検出した。東部は調査区外に至っている為、全容は不明である。検出規模は、最大長1.25m、深さ0.22mを測る。埋土は、上層—5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトに炭化物が混入、下層—5GY2/1オリーブ黒色シルトに細粒砂の偽礫が見られる。遺物は上層から古式土師器の小型丸底壺・甕・鉢の破片が僅かに出土した。

溝(SD)

SD 101

調査区北部で検出した北—南東方向の溝である。途中で西側から伸びるSD 102と合流し、北部は調査区外に向かって扇形に広がる。規模は検出長5.1m、深さ0.15m前後、幅については北端部の最も広がる地点で1.95m、それ以外は0.3~0.5mを測る。断面の形状は、逆台形を呈する。埋土は5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトに5GY2/1オリーブ黒色シルトがブロック状に混入する。遺物は古式土師器の壺・小型丸底壺・甕・高杯・鉢の破片が出土した。

SD 102

調査区北部で検出した東西方向の溝である。東部はSD 101、西部はSD 103と合流する。規模は検出長2.2m、幅0.35m前後、深さ0.14m前後を測る。断面の形状は、逆台形を呈する。埋土はSD 101と同じである。遺物は古式土師器の壺・甕の小破片が数点出土した。

SD 103

SD 102の南側から直交、合流して北西—南東方向に伸びる溝である。規模は検出長2.9m、幅0.7m前後、深さ0.1m前後を測る。断面の形状は、皿状を呈する。埋土はSD 101と同じである。遺物は古式土師器の壺・甕の小破片が数点出土した。そのうち図化できたものは、甕(8)・有段鉢(9)・小型器台(10)の3点である。

8は平底を呈するもので、外面には細くタタキメがみられる。弥生時代後期(河内V様式)に比定される。9の体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキの後さらに放射状に

ヘラミガキが施される。10は6・7と同形態のものであるが、内外面ともに磨滅が著しく、調整は不明である。

S D 104

S D 103の南西側に並行して伸びる溝である。規模は検出長1.6m、幅0.5m前後、深さ0.07m前後を測る。断面の形状は、皿状を呈する。埋土はS D 101と同じである。遺物は古式土師器の小破片が僅かに出土した。

S D 105

調査区のやや中央寄りで検出した北西—南東方向に伸びる溝である。規模は検出長4.3m、幅0.3m前後、深さ0.12m前後を測る。断面の形状は、逆台形を呈する。埋土はS D 101と同じである。遺物は古式土師器の小破片が僅かに出土した。

S D 106

調査区のほぼ中央で検出した。遺構の南部の掘方については、近～現代の溜め池形成時の攪拌(第4図点線部分)により不明である。しかし、西壁面には南部の掘方が残存しており、それからは溝状の遺構であることが推定される。規模について壁断面から復原すると、幅2.3m前後、深さ0.2m前後を測るものと思われる。また、北側掘方の中ほどからは、長さ0.65m、幅0.2m前後、深さ0.1m前後の規模で、北東方向に伸びる溝が取り付く。埋土はいずれも7.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルトである。遺物は古式土師器の小型丸底壺・壺・高杯の破片が出土した。

柱穴(S P)

S P 101

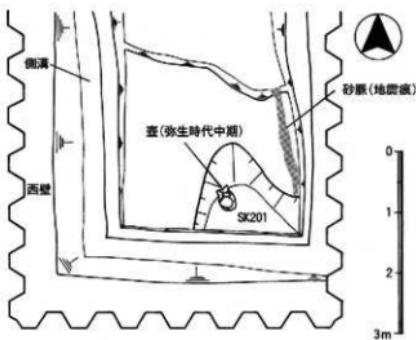
調査区北西隅で検出した。東半部はS D 101によって削平されている為に全容は不明であるが、底面に径0.1m前後の柱痕が確認できた。検出規模は最大径0.3m、深さ0.15mを測る。断面の形状は逆凸形を呈する。埋土については柱痕が2.5Y3/1黒褐色シルト、遺構掘方内埋土はN3/0暗灰色シルトに炭化物が混入する。遺物は、上層から壺の碎片数点が出土した。

【第2面<弥生時代中期前半>】

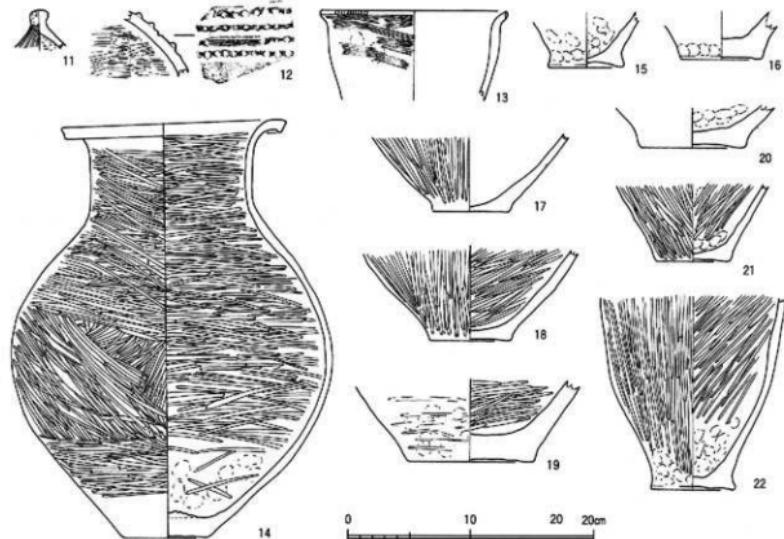
調査区南東隅で、現地表下3m前後(T.P.+6.5m前後)を測る第12層上面において、弥生時代中期前半に比定される土坑1基(S K 201)と砂脈(地震痕)を検出した。

S K 201

東部および南部は調査区外に至っている為、全容は不明である。遺構の東壁断面の観察からは、掘方の一部が下層の第14層から吹き上がりってきた砂脈によって切られているのが確認できる。検出規模は、南北幅約1.5m、東西幅約1.7m、深さ1m前後を測る。埋土は上から、イーN3/0暗灰色粘土質シルト、ウー5GY2/1オリーブ黒色粘土質シルト、エー5GY2/1オリーブ黒色粘土質シルトと5B2/1青黑色



第6図 第2面 遺構平面図(S=1/80)



第7図 S K 201出土<土器>実測図(S=1/4)

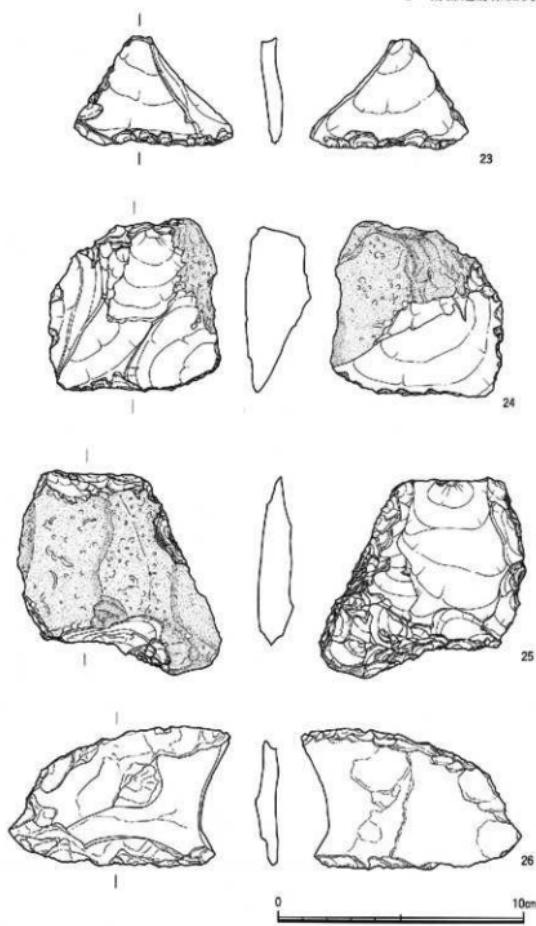
シルトの互層の3層に分層できる。遺物はイ・ウ層内から弥生時代前期～中期前半にかけての壺・甕・高杯・鉢といった多量の土器類のほか、石器類が出土した。そのなかで固化できたものは、壺蓋(11)・壺(12・14～20)・甕(13・21・22)・石器(23～26)の16点である。

11は笠形状を呈するもので、外面には縦方向に数条の線刻(工具痕)がみられる。12は広口壺の体部片と推定されるもので、外面には布巻棒圧痕を施した4帯の貼付突帯がみられる。13は口縁部が短く外反する如意形で、端部の一部にキザミメが施される。以上3点は弥生時代前期(河内I様式)に比定されるものである。14は無文の広口壺で、球膨化した体部から直立する太頸に至り、外反してやや肥厚気味に終わる口縁端部となる。調整は内外面とも密にヘラミガキされる。15～20もすべて壺の底部と思われる。21・22は甕と思われるもので、22の底部は突出気味に横に張り出した上げ底を呈する。以上14～22については弥生時代中期前半(河内II様式)に比定される。

23～26の石器の石材については、26のみが緑泥片岩製で、他は全てサヌカイト製である。23は素材剥片の主剥離面を大きく残した刃器、24・25はクサビで、向かい合う打撃で形成された剥離面がある。26については、磨製石庖丁の未製品の可能性が高い。

砂脈(地震痕)

S K 201の北東部で、地震の痕跡を示す砂脈を検出した。規模は長さ1.8m、幅0.15m前後で、南北に伸びている。砂脈は第14層の弥生時代前期以前の河川堆積層と推定される細粒砂が、第12・13層を突き破って第11層中に達する。明確な地震の発生時期は不明であるが、S K 201との先後関係からみて、本土坑形成以後に求められる。



第8図 SK 201出土<石器>実測図(S=1/2)

【造構に伴わない出土遺物】

〔第5層〕

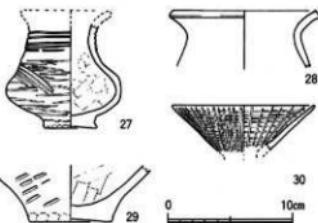
弥生時代～古墳時代前期にかけてのものが破片も含め、全体でコンテナ約1箱分出土した。そのうち図化できたものは、弥生時代前期の壺(27)・後期の壺(28・29)と古墳時代前期(布留式期)に比定される小型器台(30)の計4点である。

27は口縁部が欠損しているが、小型の広口壺と推定されるもので、肩の張る胴部を有し、頸部外面には5条前後の沈線が巡らされる。前期(河内1様式)に比定される。28は外反する口縁部で、

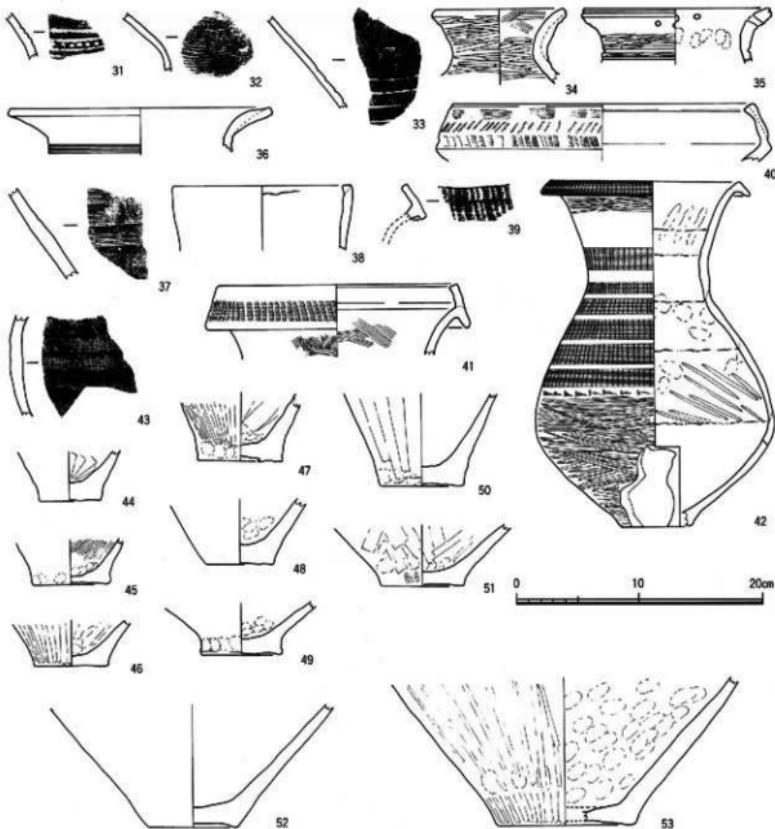
端部は若干肥厚し、外傾する面を有する。29は底部のみ残存で、外面にタタキメを残す。これら 2 者は後期～後期末(河内 V 様式)に比定される。30は受け部のみ残存で、内外面ともに横方向のヘラミガキの後、さらに縦方向のヘラミガキが施される。

〔第 9・10 層〕

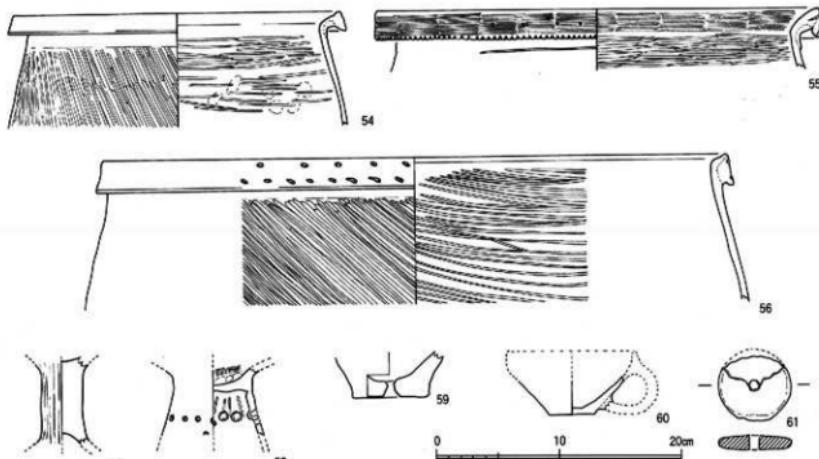
弥生時代前期～中期にかけてのものが破片も含め、全体でコンテナ約 2 箱分出土した。そのうち図化できたものは、壺(31～53)・甕(54～56)・高杯(57)・台付鉢(58)・有孔土器(59)・把手付鉢(60)・土製紡錘車



第 9 図 第 5 層出土遺物実測図 (S = 1/4)



第 10 図 第 9・10 層出土遺物実測図 I (S = 1/4)



第11図 第9・10層出土遺物実測図Ⅱ(S=1/4)

(61)の31点、そして特筆すべき遺物として「土器棺」と考えられる大型鉢(棺蓋62)・大型壺(棺身63)の2点である。

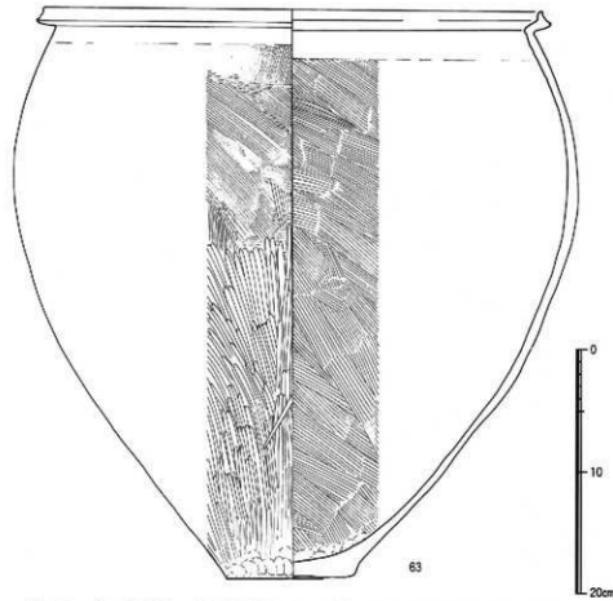
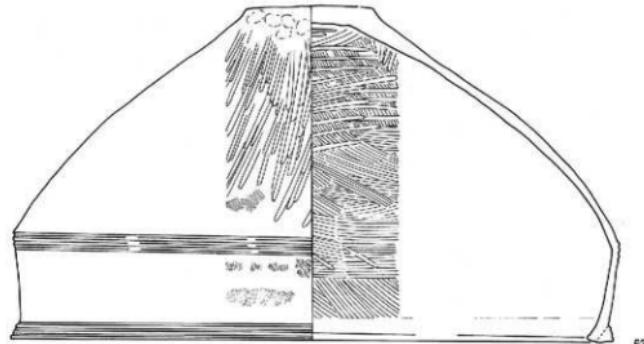
なお、41の広口壺と「土器棺」とした大型の鉢(62)および壺(63)については、今回面的な調査で確認できなかった理由から第9・10層出土遺物として扱ったが、検出状況から考えてこれらの遺物は方形周溝墓に伴う遺構として捉えるべきものである。その詳細については後述する。

31～33はいずれもヘラ描き沈線が巡らされ、31には円形刺突文が施されている。34～36は広口壺である。35は口縁端部と頸部、36は頸部にそれぞれ沈線が巡らされている。また、35の口縁部の上半には2個の紐穴が穿たれている。以上の6点は弥生時代前期(河内I様式)の所産である。

37に施された外面の文様は、直線文に扇形文を加えた擬似的な流水文で、弥生時代中期前半(河内II様式)に見られる。38は直口の口縁部を呈する無文の壺で、口縁端部外面には接合痕が確認できる。39・41は上下に拡張する付加状の口縁をもつ広口壺で、口縁部外面には簾状文が施される。40は内傾する口縁部で、口縁端部は肥厚する。外面には櫛状工具によって簾状文および列点文が装飾されるが、磨滅が著しく明瞭でない。42は下膨れの広口壺で、口縁端部は下外方へ垂下する。外面上半部は口縁部も含め、7帯の簾状文によって装飾される。成形に関しては、内面の頸部～体部中位にかけて5条の接合痕が顕著に残存する。また、体部下半部には焼成後に外から内に向けて穿たれた、長さ7cm前後・幅5cm前後を測る孔が確認できる。43は簾状文で装飾された頸部の一部と推定される。

44～53は底部のみの残存で、器種は壺と推定される。形態は45・51・52・53がやや上げ底、47・50は外側中央が窪む「ドーナツ底」を呈する。外面の調整ではナデー44・45・48・49・52、ヘナデー50・51、ヘラミガキー46・47・53の3種に分類できる。

54の口縁部は短く屈曲して、端部が上下に肥厚する。肩部外面はやや斜め方向、内面は横方向



第12図 第10層出土<土器棺(棺蓋-62、棺身-63)>遺物実測図($S=1/4$)

にヘラミガキされる。55は外折する口縁端部を下方に折り返すもので、下端部にはキザミメ、さらに端部外面には棒状工具によって刺突文が加飾される。56は大型のもので、口縁部はやや上下に肥厚し、端部外面には上下2段に刺突文が施される。調整は体部外面が斜め方向、内面が横方向のヘラミガキが行われる。

57は柱状部のみ残存で、外面は縦方向のヘラミガキが施される。58も脚部のみで、外面には横一列に貫通しない円孔とその下段に1箇所だけ円形の透かし孔が認められる。

59は外部から径0.5~1.2cmの孔が穿たれている。60は下部外面に、径0.5cm前後を測る断面円形の縦型把手の痕跡を有する。底部は平底である。61は一部剥離しているが、中央に径0.7cm前後の円孔を穿ち、全体は平滑に仕上げられている。

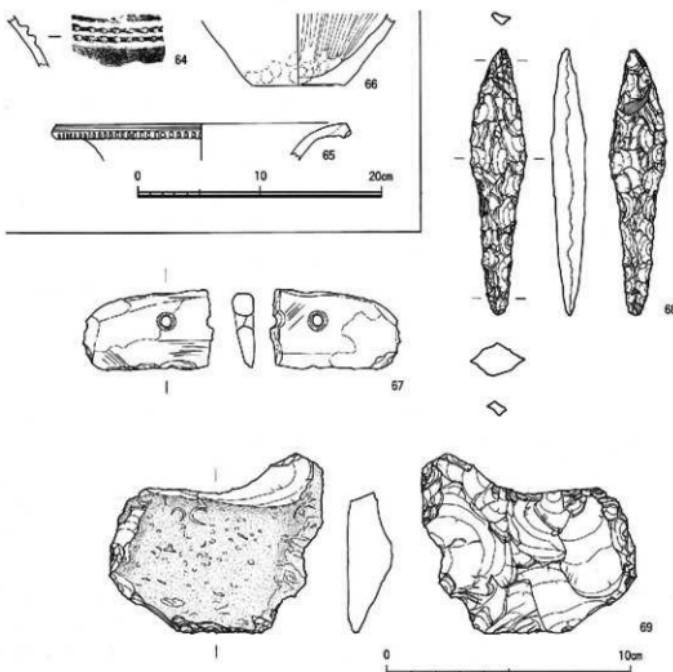
土器棺のセット関係のうち、棺蓋となる62の大型鉢は口縁端部が内外に肥厚し、段状口縁を呈する。また、内傾気味の口縁部と体部の境目にあたる屈曲部の外面には、凹線文が巡らされる。一方、棺身となる63の大型甕は口縁部が「く」の字に短く屈曲した後、端部は摘み上げる。形態は体部上半が膨らむ所謂「倒卵形」を成し、体部外面下半に緻密なヘラミガキが施される。

以上38~63の土器類は、弥生時代中期末(河内IV様式)に位置付けられる。

[第11層]

本層内からの遺物は、弥生時代前期(河内I様式)~中期前半(河内II様式)に比定される壺・甕の破片と石器類が量的にコンテナ約1/4箱分程度出土した。そのなかで図化できたものは、壺3点(64~66)と石器3点(67~69)の計6点である。

64はSK 201出土の12と同様、広口壺の体部片と推定されるもので、布巻棒圧痕を施した貼付



第13図 第11層出土遺物実測図(土器S=1/4・石器S=1/2)

突帯を2帯巡らす。65は口縁部が大きく開く広口壺で、下端部が肥厚し、キザミメを施す。66は平底で、調整については内面は縱方向のヘラミガキが顯著に窺えるが、外面は摩滅が著しく不明である。64は弥生時代前期、65・66は弥生時代中期に比定される。

石器について、67は結晶片岩製の磨製石庖丁で片側部のみ残存する。表裏面の一部は剥離している。刃部は直線、背部はやや半月形を呈する。背側に両面から穿孔した紐孔が1孔遺存する。68はサヌカイト製の石槍で、細身で肉厚を呈し、基部はしだいに細くなる形態である。69はサヌカイト製のクサビで、素材剥片の端部縁辺に潰れが認められる。

【特筆すべき遺構と遺物】

今回の調査では調査担当者の認識不足から、平面的に捉えることができなかつた弥生時代中期後半に比定される遺構および遺物がある。まず、遺構に関しては「基本層序」のなかで記述した第9層と第10層の堆積層が、該期の方形周溝墓の墳丘盛土となる可能性が高いことである。当初、第9層を弥生時代中期後半の遺物包含層として捉え、土質の異なる下層の第10層上面で精査を行ったが、遺構は確認されなかつた。さらに弥生時代前期～中期前半の遺物を包蔵する第11層上面まで掘削・精査を行い、遺構検出を試みたが、ここでも遺構は確認できなかつた。そして、その時点で地層観察用として残していた東壁面で再度分層作業を行つた結果、第9・10層の両層に径5cm前後のブロック状の土塊が含まれていることが判明した。これらは人為的作用による盛土であることがわかつた。また、あくまでも推測の域を出ないが、この盛土の土取り箇所として、第3図の西・北壁面に見られる第8層の堆積している部分が、墳丘盛土形成に伴い削平され、周溝となつたことが想定される。

次に遺物に関しては、第3図で模式的に図示したように第10層内から弥生時代中期末に比定される完形品に近い広口壺(42)、さらに同時期と見られる大型鉢(62)を棺蓋、大型壺(63)を棺身とする土器棺をそれぞれ検出した。後者の土器棺については言うまでもないが、前者の広口壺については、埋葬に伴う供獻土器の可能性が考えられる。しかし、先にも述べたように調査担当者の思慮欠如から壺に関しては平面的に掘方を検出できず、土器棺については、調査終了後の壁土除去の際に見つかったという低レベルの調査となつてしまつた。反省すべきところ大で、今後の調査に生かしたい。

3.まとめ

今回の調査地点は、本遺跡内の東部にあたる。周辺における既往の調査結果から、主に弥生時代後期～古墳時代前期にかけて居住域を示す遺構が検出されている。当地点から北西約100mの地点で実施された第23次調査によって、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて連綿と居住域が形成されていたことが判明しており、当地においても該期に比定される遺構の存在が予想された。その予想通り、今回の調査でも古墳時代前期前半(布留式期古相)に比定される遺構が、主に調査区北部で検出することができた。遺構としては溝が多く、住居跡の可能性がある遺構と判断できるのは柱穴(S P 101)1個のみである。しかし、調査区内の北壁面には、竪穴住居の床および周壁溝、そして礎板と見られる板材を有する柱穴を確認することができた(第3図-ア層に対応)。また、S K 102の埋土と遺構周辺に炭と焼土が混在することから、S K 102が炉跡であったことも

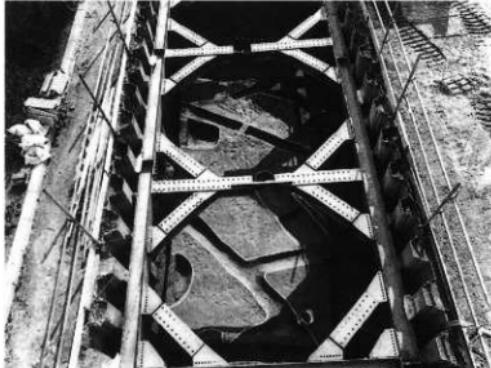
考えられる。一方、調査区南部に至っては該期の堆積層は存在するが、遺構は見つかっていない。これらのことから、該期の居住域の中心は、当地点から北部にあることが想定される。

弥生時代後期～古墳時代初頭(庄内式期)にかけての遺構および遺物は、当地点では検出されなかった。当地点に近接する南側の市道で行われた公共下水道工事に伴う第27次調査でも、該期の遺構は見つかっていない。調査を開始した当初は、古墳時代前期(布留式期古相)以降に該期の生活面が削平されたものと推測した。しかし、出土遺物中に該期の遺物が皆無であること、調査区内の壁断面にみられる水成堆積層と推定される第7・8層から、当地点は河川であった可能性が高い等の状況から勘案して、もともと当該期の遺構面はなかった可能性が高い。

最後に、今回の調査の中での最大の成果は、弥生時代前期～中期にかけての遺構の存在が確認できたことである。南に位置する第27次調査では、現地表下約2～3m間(T.P.+約6.5～7.5m間)に前期～中期の遺物を大量に含む堆積層が検出されている。中期については、第27次調査で遺物は多量に検出されているが遺構は見つかっていない。しかし、調査担当者は前期～中期にかけての非常に厚い遺物包含層から、当地点が集落の中心であることを指摘している。こういった状況から、今回検出した土坑SK201も有機的に関連するものと思われる。また、残念ながら平面的に捉えることができなかつた墓に伴う盛土および土器棺の検出は、当地点が弥生時代中期末の墓域として性格付けできる貴重な成果であり、今後周辺における調査で留意しなければならないところである。

参考文献

- ・原田昌則 1997「2. 跡部遺跡第23次調査」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・安井良三・成海佳子 1991「跡部遺跡発掘調査報告書」(財)八尾市文化財調査研究会報告31
- ・坪田真一 1999「III. 跡部遺跡(第27次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・寺沢 薫・森井貞雄 1989.6『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社
- ・原田昌則 1993「II 久宝寺遺跡第1次調査(KH84-1) 第5章 まとめ」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37



第1面 全景(北から)



第2面 全景(北から)



SK201(西から)

図版 一 遺物出土状況、砂脈（地震痕）、下層断面

I 跡部遺跡第32次調査(A T2001-32)



図版 三 調査地、発掘調査状況



調査地(南から)

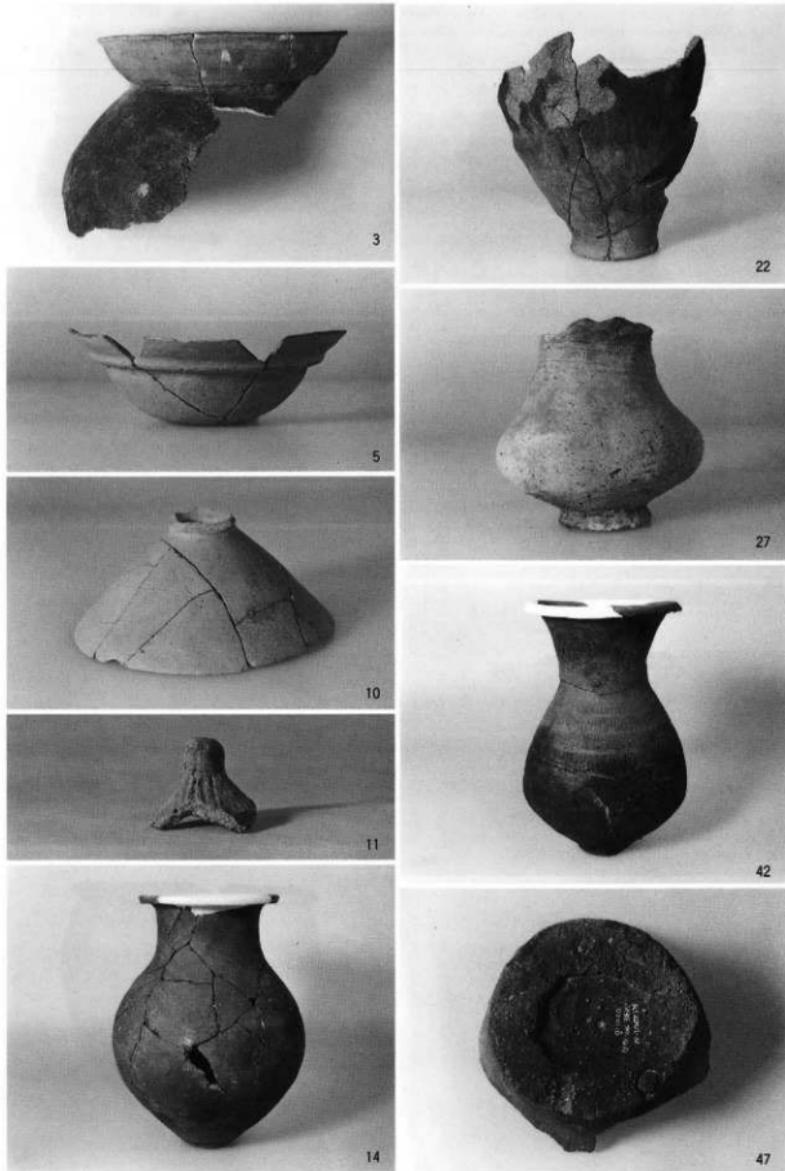


重機による表土掘削状況(南東から)



地層断面実測風景(南から)

図版四 出土遺物
(十) 器



S K102(3・5・10)、S K201(11・14・22)、第5層(27)、第9・10層(42・47)

圖版五 出土遺物（土器）



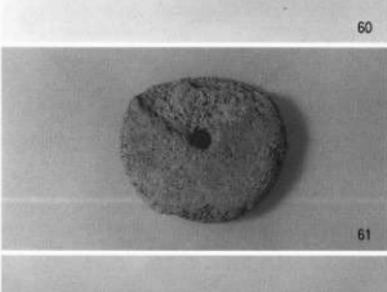
54



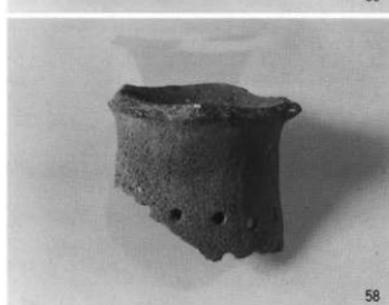
55



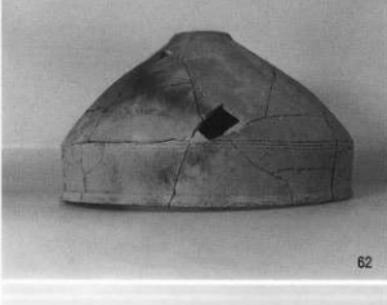
56



57



58



59

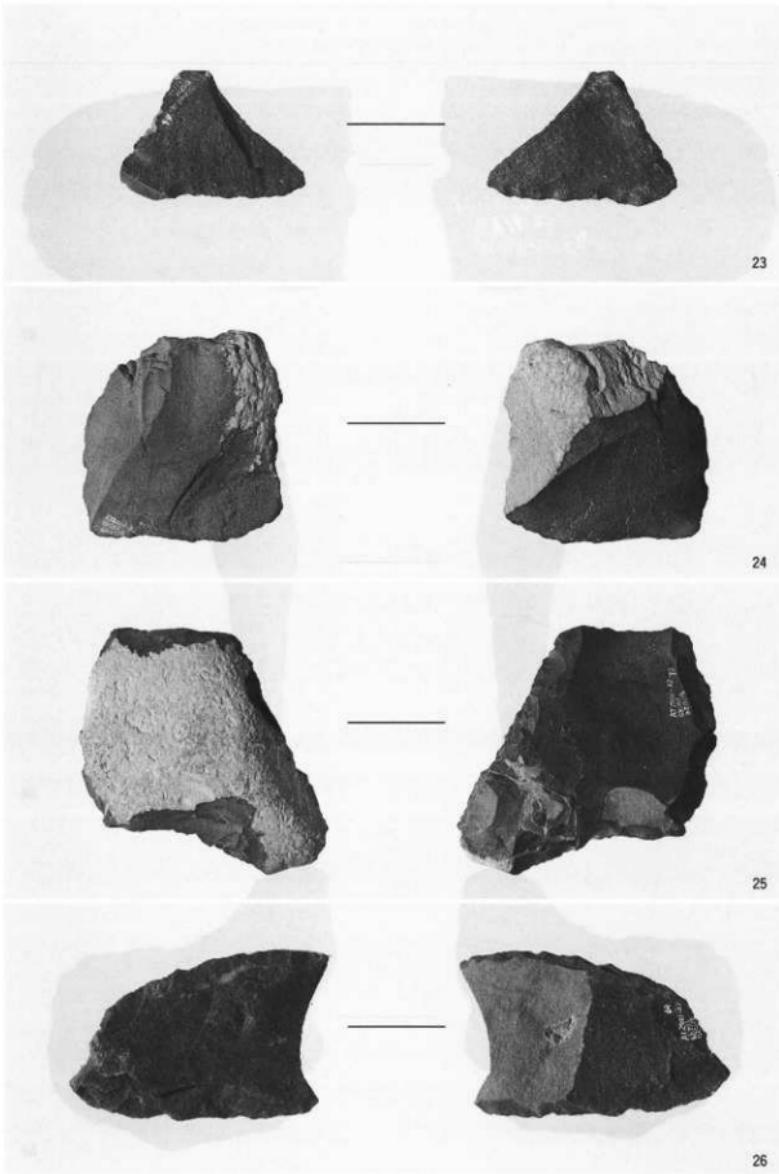


60

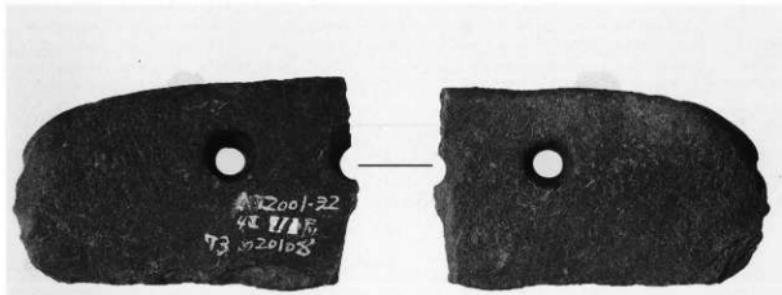


61

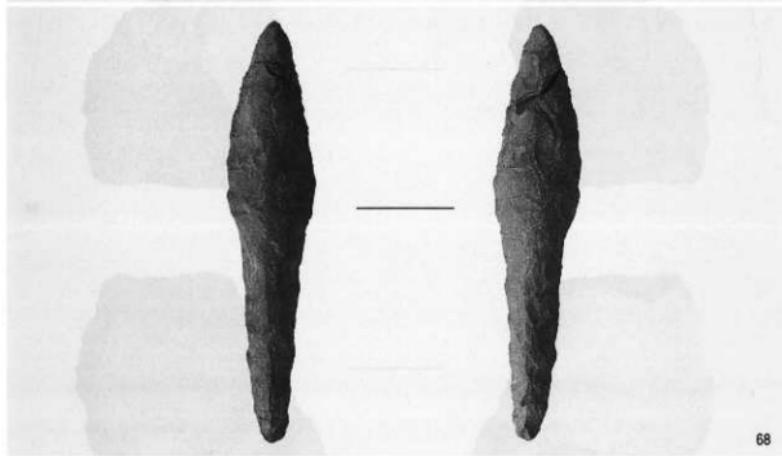
第9層・10層(53・55・58~61)、第10層(62・63)



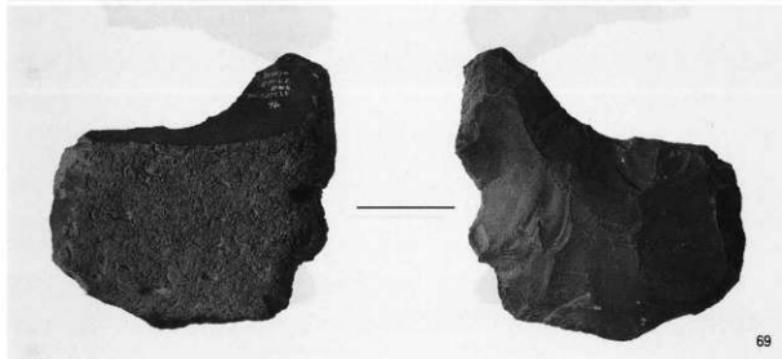
S K 201



67



68



69

第11層

II 楽音寺・大竹西遺跡第2次調査(GO2001-2)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市楽音寺2丁目～大竹5丁目で実施した6抜第37号配水管布設工事に伴う楽音寺・大竹西遺跡の発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する楽音寺・大竹西遺跡第2次調査(GO2001-2)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第292号 平成13年11月19日付)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成14年1月28日～5月28日(実働4日間、すべて夜間)にかけて、高萩千秋・成海佳子・岡田清一を担当者として実施した。
1. 調査面積は、約26m²である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時行い、平成14年9月に終了した。
1. 本書作成にあたり、本文の執筆は高萩、作図・作表・編集は成海が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	23
2.調査概要.....	23
1)調査の方法と経過.....	23
2)検出遺構と出土遺物.....	23
3.まとめ.....	25

II 楽音寺・大竹西遺跡第2次調査(GO2001-2)

1. はじめに

楽音寺・大竹西遺跡は大阪府八尾市の北東部にあたり、東大阪市との境界に位置する。行政区画では楽音寺遺跡－楽音寺1・3～5丁目、大竹西遺跡－西高安町3丁目・4丁目の一部、上尾町7～8丁目、大竹2・5丁目、楽音寺1丁目の一
部・2丁目をその範囲としている。地理的には生駒山地西麓の扇状地から沖積地に位置する。

当遺跡内では大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会による調査が数件行われている。調査の成果では、縄文時代～中世にかけての遺構・遺物を検出している。

特筆すべき成果としては、樂音寺遺跡で当調査研究会が実施した第1次調査で、縄文時代晚期の土坑、平安時代の井戸を検出している。また、大竹西遺跡の第1・3次調査では弥生時代前期の壙、中期の大畦、後期の鑄造鉄剣、古墳時代前期のメノウ製錐形石製品などを検出している。さらに大竹西遺跡の第4次調査では現地表下13mの地層から、河内湯が当遺跡まで存在することを示す貝殻を確認している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は水道布設工事に伴う発掘調査である。八尾市教育委員会の指示書に基づき、当調査研究会が事業者と協議を重ね、三者間による協定書を締結した。調査では樂音寺遺跡とし、当調査研究会が樂音寺遺跡内で行った第2次調査(GO2001-2)とした。調査区は道路の開削部分と立坑部分で、総面積約432m²のうち約26m²を行った。発掘調査は平成14年1月28日～4月25日(うち実働4日で、すべて夜間)である。

調査の方法は、開削部分・立坑部分を現地表(約T.P.+14.1～15.1m)下約2.7～3.0mまでを機械による掘削を実施し、遺構・遺物の有無および記録保存の作成に努めた。なお、調査区4箇所については北から1～4区とした。

2) 検出遺構と出土遺物

当調査地は奈良時代からの古道である東高野街道、現在の旧国道170号線の道路下に位置し、南北約300mの範囲である。調査地の現地表面の標高は、約T.P.+14.1～15.1mを測り、高低差が約1mあり、南側がやや高い。以下、調査区ごとに記す。

・ 1区

101層 盛土・アスファルト(層厚80cm)。

102層 青灰色粘土質シルト(層厚15cm)。ほぼ水平堆積。

103層 青灰色砂質シルト(層厚15cm)。ほぼ水平堆積。

104層 暗褐色礫混シルトに青灰色粘土質シルトのブロック(層厚15～25cm)。北側へ緩やかに落ち込む。

105層 矾混じり粗砂(層厚5～12cm)。104層と同じく北側へ緩やかに落ち込む。

106層 褐色礫混粘土質シルトに褐色粘土のブロック(層厚10～30cm)。ほぼ水平堆積。弥生期の

土壤化層？

- 107層 青灰色微砂混粘土質シルト(層厚20cm)。礫・炭酸鉄を含む。ほぼ水平堆積。
- 108層 灰色粗砂(層厚40cm)。ほぼ水平堆積。
- 109層 青灰色細砂(層厚10cm以上)。ほぼ水平堆積



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

第1表 周辺の発掘調査一覧表(番号は参考文献と共通)

番号	調査主体	調査期間	遺跡名	調査地
①	清原得農氏表探地点		エビジ遺跡	楽音寺所在小字エビジ
②	清原得農氏表探地点		大竹西遺跡	錦塚古墳西側小字京道下にある溜池の屋
③	八尾市教育委員会	19790601～19791031	大竹遺跡	楽音寺2丁目・大竹5丁目
④	当調査研究会	19830623～19831003	楽音寺遺跡	大字楽音寺263-1他
⑤	八尾市教育委員会	19850603	大竹遺跡・楽音寺遺跡	楽音寺2丁目40
⑥	八尾市教育委員会	19880630～19880702	楽音寺遺跡	楽音寺5丁目69
⑦	八尾市教育委員会	19890628	楽音寺遺跡	楽音寺5丁目65・67
⑧	八尾市教育委員会	19960726～19960806	大竹遺跡	大竹5丁目・7丁目
⑨	八尾市教育委員会	19960109	楽音寺遺跡	楽音寺7丁目

・2区

- 201層 盛土・アスファルト(層厚80cm)。
- 202層 青灰色礫混砂質シルト(層厚15cm)。ほぼ水平堆積。
- 203層 淡褐色礫混砂質シルト(層厚50cm)。ほぼ水平堆積。
- 204層 暗褐色礫混砂質シルト(層厚25cm)。ほぼ水平堆積。
- 205層 暗灰色砂質シルト(層厚25~30cm)。ほぼ水平堆積。
- 206層 暗灰褐色礫混砂質シルトと 植物遺体の互層(層厚15cm)。北方向へ緩やかに下がる。
- 207層 白灰色礫(層厚10cm)。206層と同じく、北方向へ緩やかに下がる。
- 208層 黄褐色粘土質シルト(層厚5cm以上)。

・3区

- 301層 盛土・アスファルト(層厚80~90cm)。
- 302層 灰褐色粘質シルト(層厚10~20cm)。中世ごろの土器片をごく微量含む。ほぼ水平堆積。
- 303層 灰色砂礫混じり粘質シルト(層厚15~20cm)。2~3cmの小石を含む。ほぼ水平堆積。
- 304層 明褐色~淡茶灰色礫混じり微砂(層厚45cm)。上部では酸化鉄分を多量に含んでいる。北方向へ落ちるラミナがみられる。ほぼ水平堆積。
- 305層 灰黄色微砂~砂質シルト(層厚15~25cm)。ほぼ水平堆積。
- 306層 暗灰色砂質シルト(層厚15~25cm)。礫を少量含む。
- 307層 淡灰色砂礫混じりシルト(層厚25cm以上)。

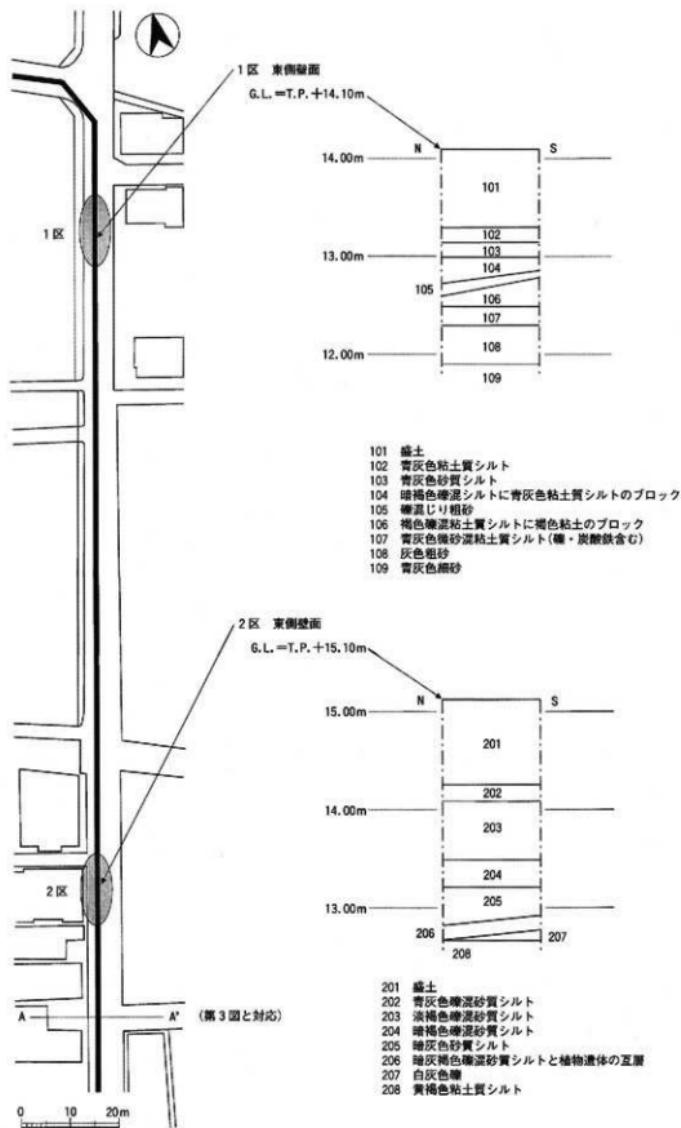
・4区

- 401層 盛土・アスファルト(層厚90~100cm)。
- 402層 暗褐色礫混じりシルト(層厚15cm)。拳大(径5~10cm)の礫を含む。
- 403層 明褐色砂質シルト(層厚20cm前後)。
- 404層 黄灰色シルト(層厚10~20cm)。
- 405層 暗褐色シルト(層厚15cm以上)。堅く締まっている。

調査の結果、1区では現地表下約1.5~1.8m(T.P.+12.5~12.8m)に存在する106層が弥生期と思われる土壤化した地層であることを確認した。3区では現地表下0.8m(T.P.+14.5m)前後に存在する302層から中世ごろの土器片がごく微量出土したが、遺構とみられるものは確認できなかった。

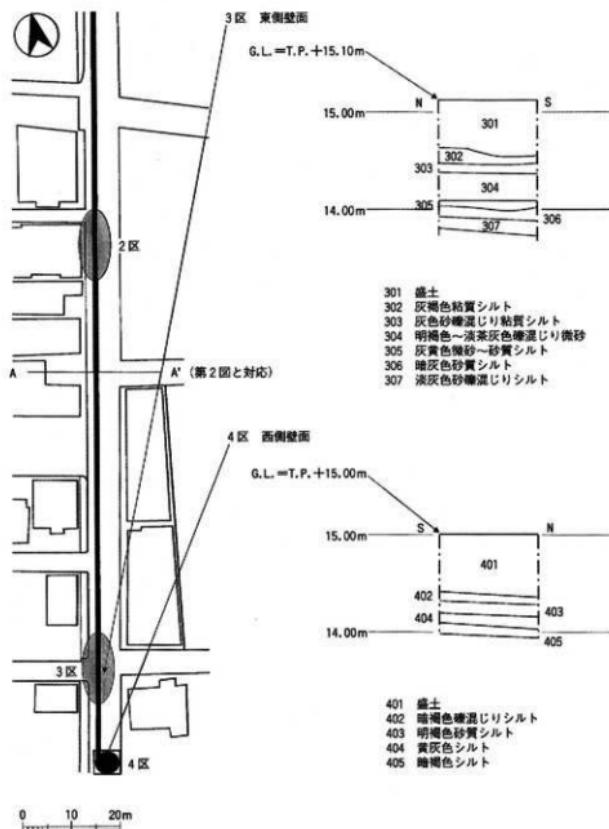
3.まとめ

今回の調査は開削部分と立坑部分の限定した4箇所の部分的な調査であった。調査では、弥生期、中世期と思われる地層の存在を確認した。しかしながら遺構とみられるものは確認できなかった。また、4区は古墳時代中期に築造されたと思われる鏡塚古墳の東側約30mに隣接する調査区であったが、埴輪や古墳に関連するものはみられなかった。



第2図 1区・2区設定図 ($S=1/1000$) 及び柱状図 ($S=1/50$)

II 楽音寺・大竹西遺跡第2次調査(GO2001-2)



第3図 3区・4区設定図(S=1/1000)及び柱状図(S=1/50)

註

- 註1 高萩千秋 1984「7. 楽音寺遺跡第1次調査」「昭和58年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告5 (財)八尾市文化財調査研究会
- 註2 高萩千秋・西村公助・岡田清一他 1992「1. 大竹西遺跡第1次調査(OT N91-1)」「平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」・西村公助・樋口 薫 1997「7. 大竹西遺跡第3次調査(OT N96-3)」「平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 註3 樋口 薫 2000「4. 大竹西遺跡第4次調査(OT N99-4)」「平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会

参考文献

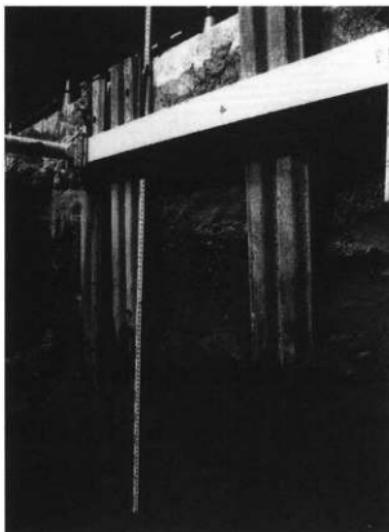
- ①・②原田 修・久貝 健・鳥田和子 1973「第一部 高安の遺跡と遺物」「特輯 清原得巣所蔵考古資料図録」大阪文化誌 第2巻、第2号・通巻第6号 (財)大阪文化財センター
- ③山本 昭・原田昌則 1980「大竹遺跡－八尾市水道局送水管敷設工事に伴う埋蔵文化財調査－」八尾市文化調査報告5 八尾市教育委員会
- ④高萩千秋 1984「7. 楽音寺遺跡第1次調査」「昭和58年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告5 (財)八尾市文化財調査研究会
- ⑤米田敏幸・鶴村友子 1986「2. 楽音寺遺跡の調査」「八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告12 昭和59年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ⑥近江俊秀 1989「10. 楽音寺遺跡(63-157)の調査」「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告19 昭和63年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ⑦岡田清一 1990「9. 楽音寺遺跡(89-167)の調査」「八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ」八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ⑧吉田野乃 1997「5. 大竹遺跡(96-250)の調査」「八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告37 平成8年度公共事業 八尾市教育委員会
- ⑨吉田野乃 1997「6. 楽音寺遺跡(95-588)の調査」「八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市文化財調査報告37 平成8年度公共事業 八尾市教育委員会



1区東壁(T.P.+11.9~14.1m)



3区(北西から)



2区東壁(T.P.+12.8~15.2m)



3区東壁(T.P.+13.8~15.1m)



III 木の本遺跡第10次調査（S K2002-10）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市木の本2丁目20番地で実施した木の本土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本発掘調査は、財団法人八尾市文化財調査研究会が木の本遺跡内で行った第10次調査(SK 2002-10)で、調査業務は八尾市教育委員会作成の指示書(八教生文第347号 平成15年1月6日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年1月28日～2月3日(実働5日)にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約75m²を測る。
1. 現地調査には飯塚直世・岩本順子・鈴木裕二・横山妙子が参加した。
1. 内業調査は現地調査終了後隨時行い、平成15年3月31日に終了した。
1. 本書に関わる業務は以下の通りである。
【遺物実測】飯塚 國津れいこ 鈴木
【トレース】市森千恵子
【執筆・編集】西村

本　文　目　次

1.はじめに.....	31
2.調査概要.....	31
1) 調査の方法と経過.....	31
2) 検出遺構と出土遺物.....	32
3.まとめ.....	40

III 木の本遺跡第10次調査(S K2002-10)

1. はじめに

木の本遺跡は現在の行政区画では、八尾市木の本1～3丁目、南木の本2～9丁目、空港1～2丁目に所在している。当遺跡は地形的には、河内平野の中を北西方向に流れている平野川の両岸に広がる沖積地に存在する。

今回の調査地は当遺跡内の北西に位置し、当調査地の付近では、大阪府教育委員会(以下府教委と記載)、八尾市教育委員会(以下市教委と記載)、財団法人八尾市文化財調査研究会(以下研究会と記載)が調査を行っている。その結果、弥生時代中期・古墳時代前期～中期・平安時代の遺構の検出および遺物の出土があり、各時代の生活の跡が確認されている。

当調査地周辺での主な成果をあげると、北東約300mで市教委が昭和55年度に行なった調査では、弥生時代中期前半と古墳時代前期・中期の溝・井戸・土坑・掘立柱建物・柱穴群を検出している(原田1983)。また、北東側約150mで、研究会が行なった第2次調査では、平安時代中頃の土器溜めを検出している(米田他1984)。この土器溜め出土の遺物は10世紀前半～中頃に比定されている(近江・岡田1989)。さらに、東側約75m地点では平成8年度に研究会が第7次調査を行っており、T.P.+7.0m前後で、古墳時代前期の土器を伴う地層を確認している(岡田1998)。

当遺跡の西側には、羽曳野丘陵の北端に位置する八尾南遺跡が隣接している。この遺跡では旧石器時代～近世に至る遺構を検出している。また、東側には、平野川両岸の沖積地に広がる田井中遺跡が存在している。田井中遺跡では縄文時代晩期～古墳時代中期頃の集落を検出している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約0.5mまでを機械によ



り掘削を行い、以下約0.2mについては人力で掘削し遺構の検出に努めた。

今回の調査では調査区の南西角を起点に北へ5m毎に区切り、合計10区画にわたり地区割を設定した。地区は南側からA～J区とする。今回の調査では、八尾市発行の1/2500の地図に記載している標高値（調査地東側道路上T.P. +10.0m）を使用した。

2) 検出遺構と出土遺物

層序

1層は10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土で、上面の標高はT.P. +9.5m前後を測る。現在の水田耕作土で層厚約0.2mを測る。

2層は2.5Y5/4黄褐色粗粒砂混粘土で、層厚約0.1～0.2mを測る。

3層は10YR5/2灰黄褐色細粒砂混粘土で、層厚約0.1～0.2mを測る。

4-1層は10YR6/1褐灰色粗粒砂混粘土（鉄分含む）である。4-2層は細粒砂と粗粒シルトのラミナ、4-3層は粗粒シルトと細粒シルトのラミナである。これらの層からは遺物の破片が少量出土した。

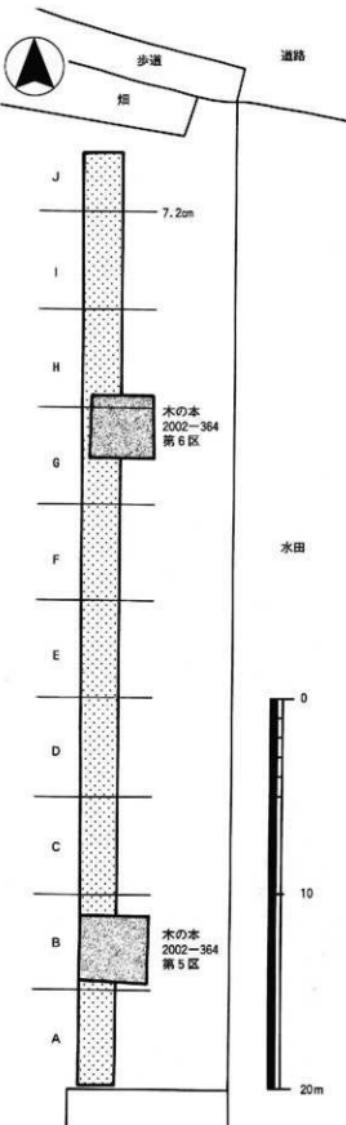
5-1層は7.5YR5/6明褐色細粒砂混粘土、5-2層は7.5YR4/6褐色粗粒砂混粘土である。5-3層は10YR6/6明黄褐色粘土質細粒シルトで、鉄分やマンガンを含んでおり、攪拌を受けている。

5-3層の上面は部分的に5-1層や5-2層が盛られ、その上から切り込む遺構を検出した。5層はG区以南で確認した。

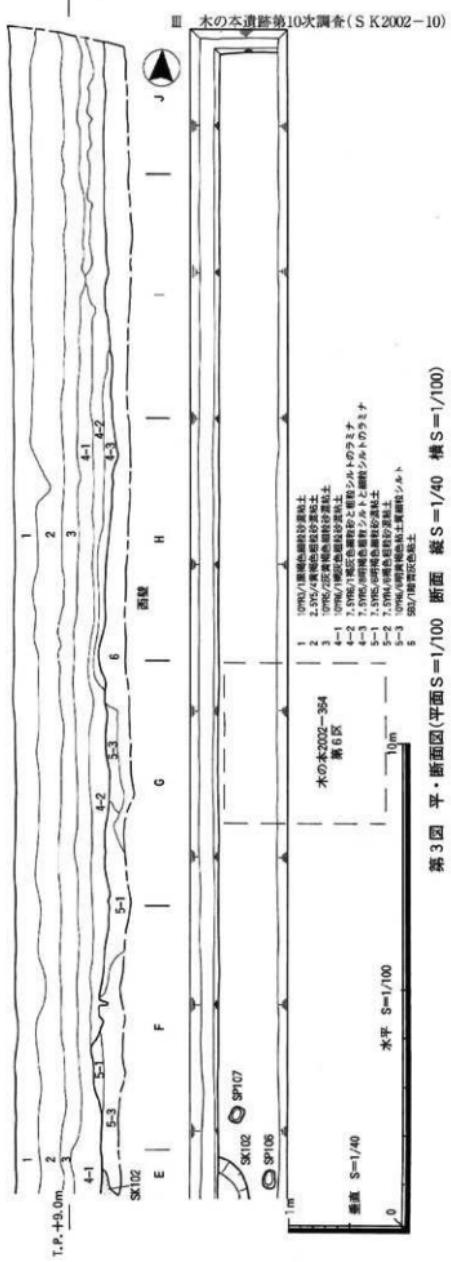
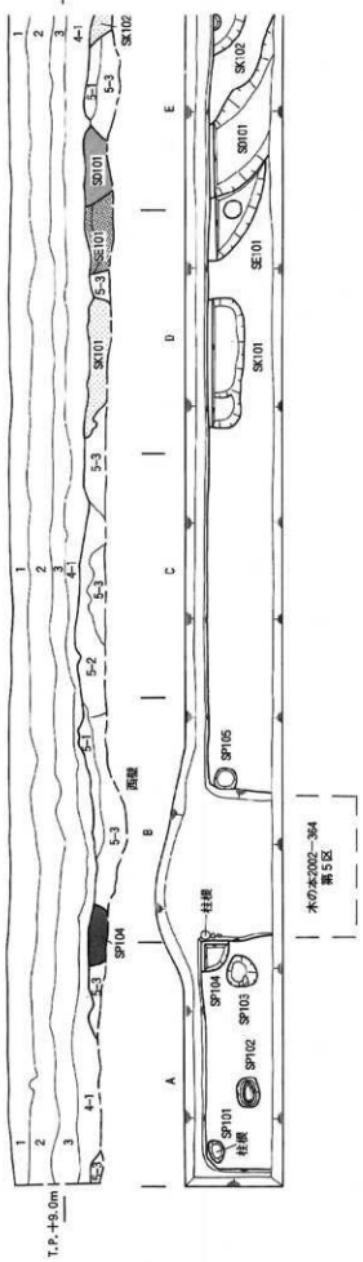
6層は5B3/1暗青灰色粘土で、調査区の北側で確認した。遺構検出面のベースになるが、この層上面では遺構の検出はなかった。

検出遺構・出土遺物

5層上面で、井戸1基（S E 101）、柱穴7基（S P 101～107）、土坑2基（S K 101・102）、溝1条（S D 101）を検出した。なお、遺物番号のうち木製品にはW、石製品にはSを番号の前に付け、土器などの通し番号とは区別し記載した。



第2図 地区割図 (S=1/250)



第3圖 平・断面図(平面S=1/100 断面 縦S=1/40 橫S=1/100)

井戸 (S E 101)

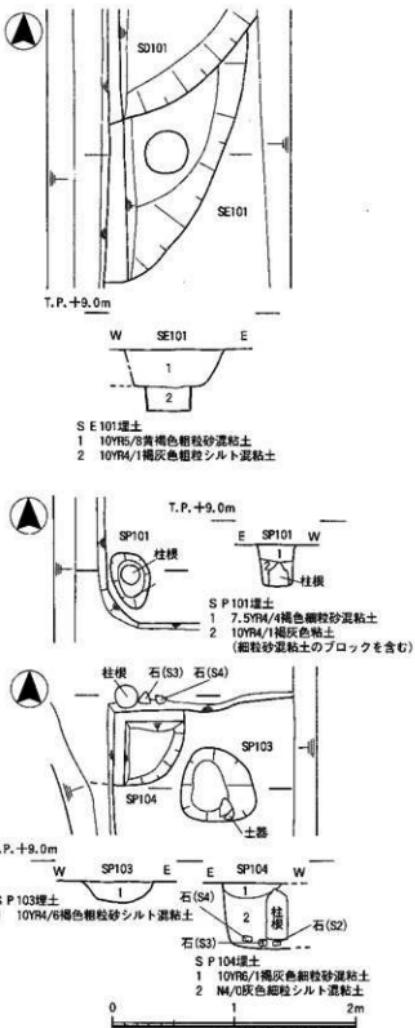
S E 101

D～E区で検出した。遺構の南側から東側にかけての肩を検出したが、北側は S D101に切られ、西側は調査区外に至るため平面形状・断面形状は不明である。検出した南北幅は約2.0m、東西幅は約1.0mで、深さ約0.5mを測る。南側では検出面から約30cm下で井戸側を1ヶ所確認した。埋土は井戸側内2と上部埋土1の2層に分かれる。1は10YR5/8黄褐色粗粒砂混粘土で、2は10YR4/1褐灰色粗粒シルト混粘土である。井戸側には曲物が2段使用されていた。上段径約36cm、高さ約8cm、下段径約34cm、高さ約9cmを測る。井戸側は曲物本体と思われたが、高さが低いことから、曲物の外側のタガが残っていたと思われる。なお、この曲物は腐食が激しく、取り上げることが不可能であった。遺物は井戸側内と上層埋土から出土した。このうち図化できたものは4点である。1は井戸側内から出土した瓦器碗である。この碗は内湾する部体からやや外反する口縁部である。端部は尖りぎみに丸く終わる。体部内面は横方向のミガキ。外面は指圧痕が残るが丁寧にミガキを分割して施している。12世紀初め頃に比定できる。2・3・S1は上層埋土から出土した。2は内黒の黒色土器の碗である。「ハ」の字にひらく高台部で端部は丸く終わる。内外面ナデを施す。3は用途不明の土塊で、粉殻?の粒が混じる。S1は用途不明の石である。割れており本来の形状はわからない。平らな板状である。

柱穴 (S P 101～S P 107)

S P 101

A区で検出した。平面形状は南北方向に長い楕円形で長径0.45m、短径0.3mを測る。断面形状は台形で、深さ0.35mを測る。埋土は上から7.5YR4/4褐色細粒砂混粘土、10YR4/1褐灰色粘土のブロックである。中央の底からは柱根(W1)を検出した。遺物は上層から土師器、須恵器の破片が出土した。このうち図化できた物は2点である。4は土師器の杯である。上外方に伸びる部体から屈曲し外反する口縁部。口縁端部は尖り



第4図 S E 101・S P 101・S P 103・S P 104

平・断面図 (S=1/40)

ぎみに丸く終わる。体部内外面ナデを施し、外面には指圧痕がある。口縁部内外面ヨコナデを施す。W1は柱根である。残存長22.8cm、径20cmを測る丸材である。底は平らな面であり、この面を水平にして置いていた。下部には貫通する穴があり、穴の形状は綫長の長方形である。穴の径は長径約11.5~13cm、短径6.5~8cmを測る。

S P 102

A区で検出した。平面形状は南北方向に長い隅丸の長方形で、長径0.6m、短辺0.4mを測る。断面形状は中央がくぼむ逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は10YR6/1褐色粗粒シルト混粘土で、土師器、黒色土器、須恵器などの破片が出土した。このうち図化できたものは1点である。5は土師器の杯で、直線的に伸びる体部から屈曲しやや外反し伸びる口縁部である。端部は尖りぎみに丸く終わる。体部内外面ナデ、外面には指圧痕がある。口縁部内外面ヨコナデを施す。

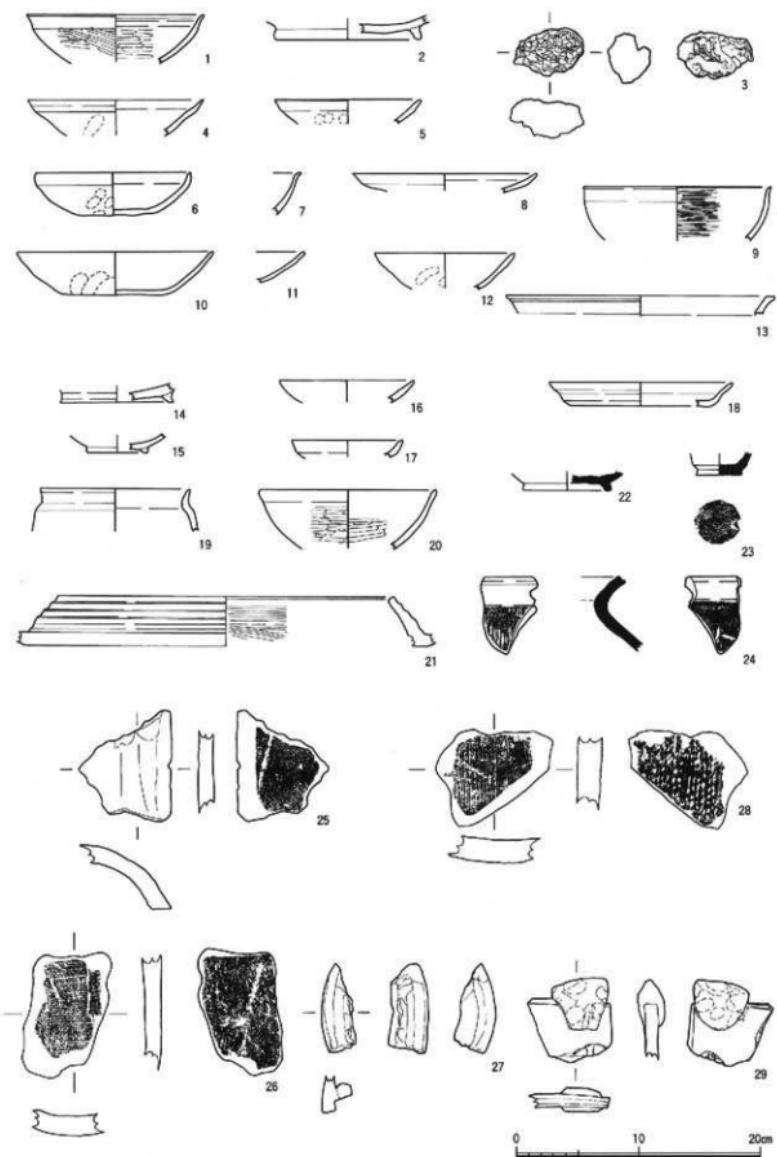
S P 103

A区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形で、長径0.65m、短径0.6mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色粗粒シルト混粘土である。遺構の南部には、ほぼ完形近くまで復元可能な土師器の杯が口縁部を上にした状態で出土した。また、土師器、須恵器、綠釉陶器等の破片も出土している。このうち図化できたものは2点である。6は土師器の杯である。平らな底部から直線的に外側へひらく体部で、口縁部は屈曲し伸びる。端部は尖り気味に丸く終わる。体部内面指圧痕、外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデを施す。10世紀中葉に比定できる。7は綠釉陶器の破片である。内外面に光沢がある緑色の釉を塗っている。器形の輪郭から碗になると思われる。

S P 104

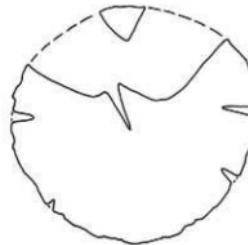
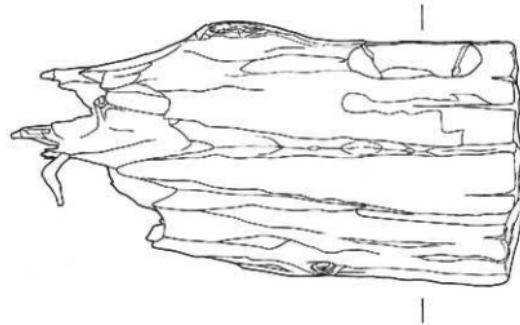
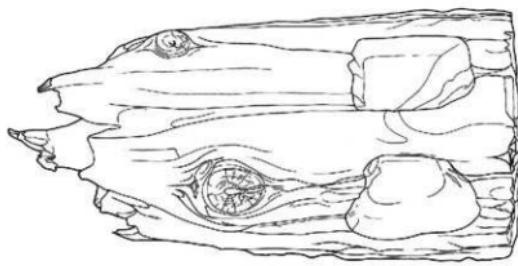
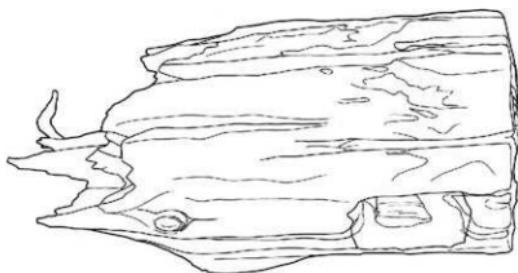
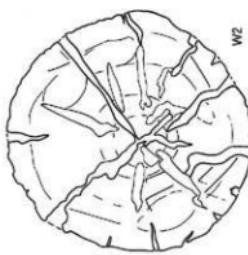
A・B区で検出した。平面形状は遺構の西側が調査区外に至るため不明である。検出した径は約0.5mを測る。東側は隅が丸い形状であることから、隅丸方形を呈していた可能性が高いと考える。断面形状は逆台形で、深さ約0.4mを測る。埋土は上から10YR6/1褐色細粒砂混粘土、N4/0灰色細粒シルト混粘土である。中央で柱根(W2)を検出した。柱の下には根石(S2)【本書で言う根石とは、柱穴掘形の底に据える石のことを言う】が据えられていた。なお、この遺構は遺構確認調査(木の本2002-364)の第5区で検出した柱穴501と同一のものである。

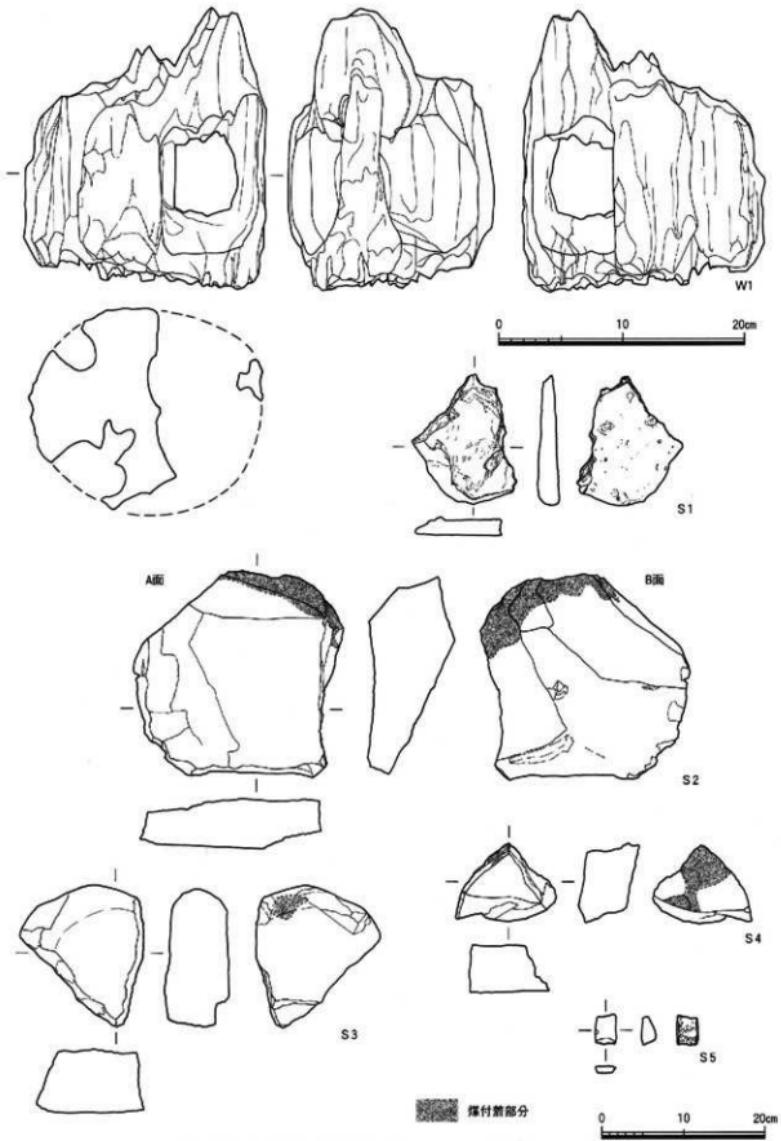
上層からは土師器、黒色土器などの破片が少量出土している。このうち図化できたものは6点である。8は土師器の皿である。平らな底部から屈曲し直線的に伸びる口縁部で、端部は尖り気味に丸く終わる。9は内黒の黒色土器の碗である。体部は内湾し口縁部はやや外反する。口縁端部は段をもつ。内面は横方向のミガキ、外面はナデを施す。10世紀中葉頃に比定できる。S2は根石である。柱を置いた面をA面(実測図左側)、逆の面をB面(実測図右側)とする。平面形状は五角形で、断面形状は長方形である。A・B面ともに平らにするために加工した痕跡が残っていた。両面の一部には黒くこげている跡が確認できた。この根石は、研磨している部分があり、根石として使用する以前にも他の用途として使用していた可能性が高いと考えられる。S3の平面形状は三角形で、S4の平面形状は不定形である。S3・S4は根石(S2)の東側に並んで置かれていた。W2は柱根である。残存長41.9cm、残存径約20.5cmを測る丸材である。底は平らな面であり、この面を水平にして置いた。下部に貫通する穴があけられており、穴は綫長の長方形で長辺10cm、短辺7.5cmを測る。



第5図 出土遺物実測図 (S=1/4)

第6図 出土遺物実測図(S=1/4)





第7図 出土遺物実測図(木製品 S = 1/4・石製品 S = 1/6)

S P 105

B区で検出した。平面形状は隅丸方形で、長径約0.45m、短径約0.4mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.15mを測る。埋土は7.5YR5/6明褐色細粒砂混粘土のブロック土で、土師器の破片が少量出土した。

S P 106

E区で検出した。平面形状は隅丸の長方形である。長径約0.35m、短径約0.25mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.2mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土で、土師器の破片が少量出土した。このうち図化できたものは1点である。10は土師器の杯である。平らな底から内湾する体部で、口縁部は丸く終わる。体部内面ナデ、外面指圧痕を施す。10世紀後半頃に比定できる。

S P 107

F区で検出した。平面形状は隅丸長方形で、長径約0.35m、短径約0.25mを測る。断面形状は逆台形で、深さ約0.25mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土である。土師器・黒色土器の破片が少量出土した。

なお、柱穴として記載した遺構のうち、S P 102は柱根および柱痕跡の確認はなかったが、掘形の形状から、柱が抜き取られた可能性が高いと判断されるため柱穴とした。また、S P 103・S P 105～107は検出時には柱穴としたが、柱根や柱痕跡の確認はなかった為、柱穴以外の遺構の可能性が高いと考えられる。

土坑(S K 101・S K 102)

S K 101

D地区で検出した。平面形状および断面形状は遺構の西側が調査区外に至るため不明である。検出した平面形状は南北に長い隅丸長方形で、南北幅約2.65m、東西幅約0.7mを測る。断面形状はゆるやかにさがる逆台形で、深さ0.2mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色粗粒シルト混粘土で、土師器、黒色土器、須恵器の破片が出土した。この内図化できたものは1点である。11は土師器の杯である。直線的に伸びる体部で、口縁端部は丸く終わる。内外面にナデを施す。

S K 102

E地区で検出した。平面形状および断面形状は遺構の西側が調査区外に至るため不明である。検出した平面形状は半円形で、径約1.65mを測る。深さ約0.2mを測る。埋土は7.5YR5/1褐灰色細粒砂混粘土で、土師器、黒色土器の破片が出土した。そのうち図化できたものは1点である。12は土師器の杯で、口縁部は直線的に外側へ伸び、端部は丸く終わる。体部外面はナデであり、指圧痕が残る。内面はナデを施す。

溝(S D 101)

S D 101

E区で検出した。南西一北東方向に伸びる溝で、幅は約1.4m、深さは0.2mを測る。埋土は7.5YR6/1褐灰色粗粒シルトと細粒砂のラミナである。溝内からは土師器や須恵器の破片が出土した。この内図化できたものは1点である。13は土師器の壺である。外側へ直線的に伸びる口縁部で、端部に面をもつ。内外面ともにヨコナデを施す。

遺構に伴わない出土遺物

4層からは土師器、瓦器、須恵器、瓦などが出土した。このうち図化できたものは15点である。

14・15は土師器の杯である。14は「ハ」の字にひらく高台部で、端部は面をもつ。底部は平らであるが、中心に向って低くなる。内外面ともにナデ。15は平らな底部から内湾する体部である。高台部は「ハ」の字にひらく、端部は面をもつ。内外面ともにナデ。16~18は土師器の皿である。16は直線的にひらく口縁部で、端部は丸く終わる。内外面ともにヨコナデ。17は平らな底から屈曲し直線的にひらく口縁部で、端部は丸く終わる。内外面ともにヨコナデ。18は平らな底から屈曲し外反する口縁部で、端部は丸く終わる。内外面ともにヨコナデ。19は土師器の壺である。内湾する体部から屈曲し外反する口縁部。体部内外面ナデ、口縁部内外面ヨコナデ。20は瓦器槌。内湾する体部からやや外反気味に外へひらく口縁部で、端部は丸く終わる。内面ミガキを施す。外面には横方向のミガキを丁寧に施すが、部分的に指圧痕が残る。21は瓦質の羽釜。内湾する口縁部で、外面は凹線状にくぼむ。口縁部内面ハケナデ、外面ヨコナデを施す。22・23は須恵器の壺である。22の底部は平坦で、「ハ」の字にひらく高台部が貼り付く。内外面は回転ナデ。23は突出する平底で、底には回転糸切りの痕跡が残る。内外面は回転ナデである。24は須恵器の壺で、外面平行タタキ。内面同心円タタキを施す。25は丸瓦で凸面はナデ、凹面に布目を施す。26は平瓦で、凸面はナデ、凹面に布目を施す。27は用途不明の土製品である。割れており形は不明である。縁は円形を呈し、内側には粘土の塊をいくつか重ねて貼り付けている。S5は砥石である。割れており本来の形は不明である。使用面は3面確認した。

また、出土した屑を限定する事ができなかったが、掘削土中からは瓦(28)や用途不明土製品(29)が出土した。28は平瓦で、凹面に布目、凸面に繩目を施している。29は割れており形は不明である。端部には角があり、面を持っている。板状の粘土塊を折り曲げて貼り付ける部分がある。

3.まとめ

今回の調査では、柱根が残っていた柱穴を検出したことから、掘立柱建物が存在していた可能性が高いことが判明した。建物の時期は、出土した遺物から、平安時代中頃(10世紀中葉)には建てられており、井戸(S E 101)が廃絶する12世紀初め頃まで存在していたと思われる。しかし、建物の規模などの詳細は、調査が狭いため不明であった。同時期の遺構は、北東約150mの研究会第2次調査(米田他1983)(近江・岡田1989)で検出したSW-02(10世紀前半~中葉)がある。このことから、第2次調査地までは遺構が広がっていた可能性が高いと推測される。一方、東約75mの研究会第7次調査(岡田1998)では同時期の遺構は認められないことから、真東へは広がらないと推測される。

参考文献

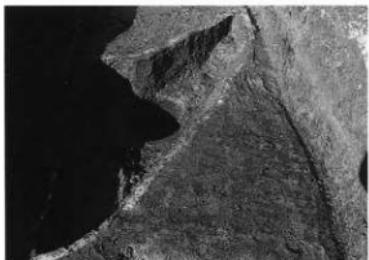
- ・米田敏幸他 1983「1. 木の本遺跡 福田マンション建設に伴う発掘調査概要」「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査—その成果と概要—」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則他 1983「第3章 木の本遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告2 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・近江俊秀・岡田清一 1989「河内中南部における古代末期から中世の土器の諸問題—木の本遺跡SW-02出土遺物を中心として—」「八尾市文化財紀要4」八尾市教育委員会文化財室
- ・岡田清一 1998「Ⅶ 木の本遺跡(第7次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告60」(財)八尾市文化財調査研究会



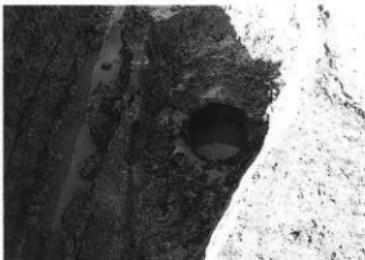
掘削状況(南東から)



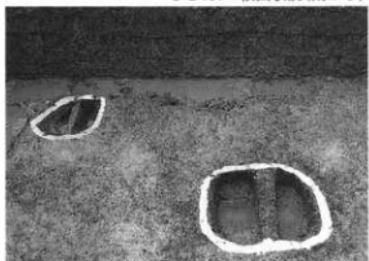
全景(北から)



S E 101 検出状況(南から)



S E 101 井戸側検出状況(南から)



S P 101・S P 102 全景(東から)



S P 101 柱根検出状況(北から)



S P 103・S P 104 全景(東から)



S P 103 遺物出土状況(南から)



SP 104 柱根検出状況(北から)



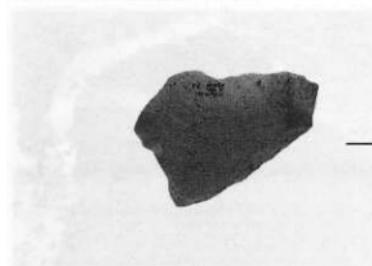
SE 101・SD 101 全景(北東から)



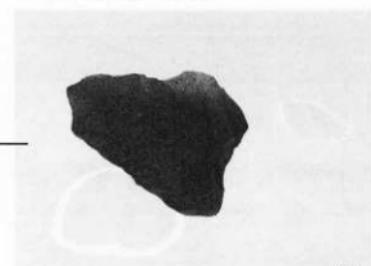
1



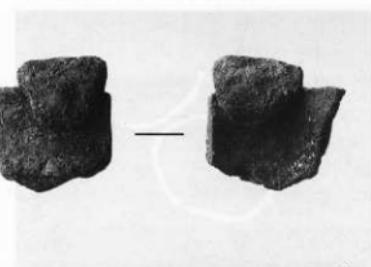
6



28



27



29

出土遺物



W1

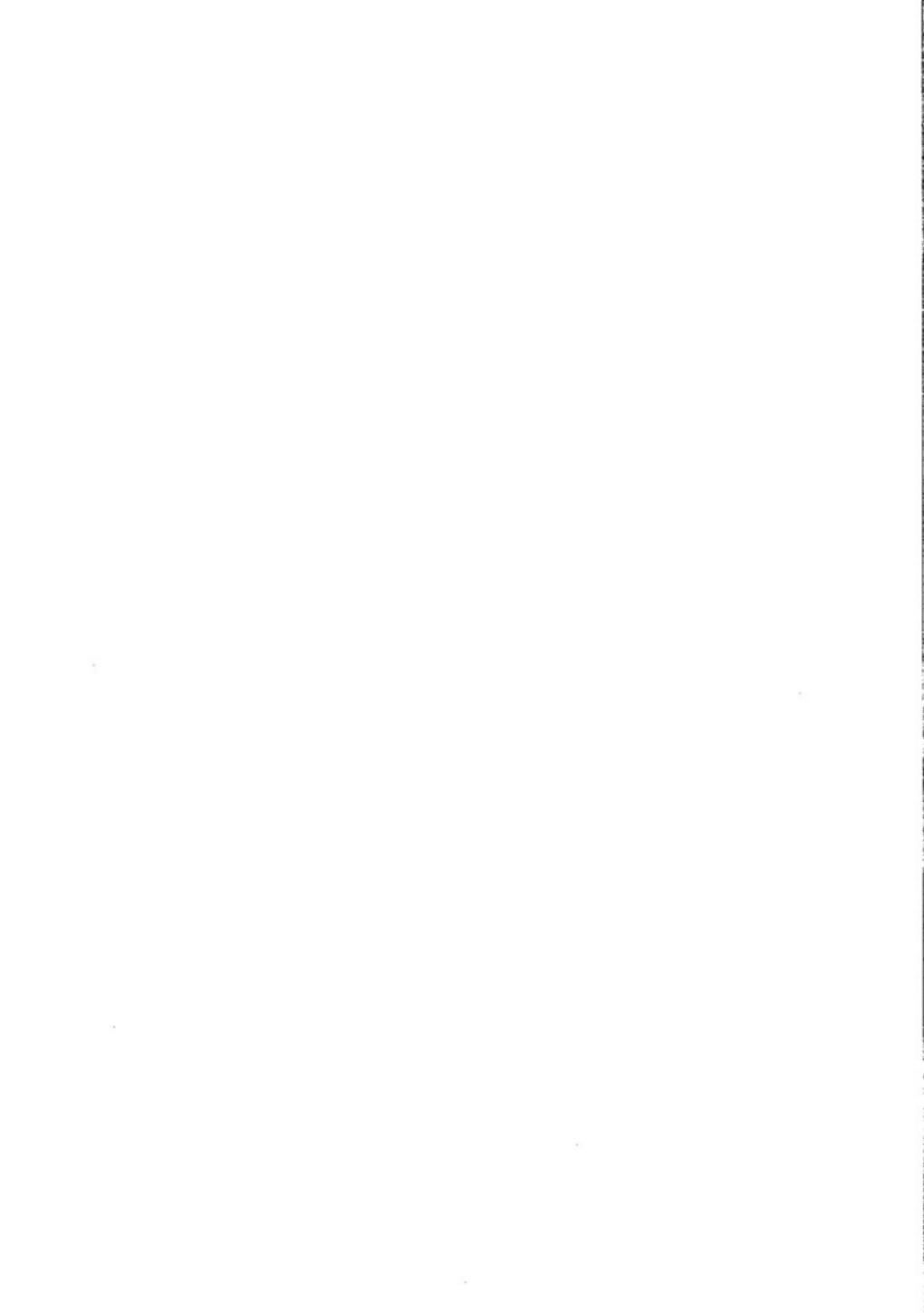


W2



S2

出土遺物



IV 久宝寺遺跡第44次調査（K H2002-44）

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市春日町1丁目、跡部北の町1丁目、大字渋川で実施した竜華東西線電線共同溝敷設工事(1工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査で報告する久宝寺遺跡第44次調査(KH2002-44)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第242号 平成14年10月17日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成14年11月26日～12月13日(実働11日間)にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約55m²を測る。なお、調査においては荒川和哉・岩本順子・鈴木裕治・多田一美・實樹婦美子が参加した。
1. 本文の執筆・編集は岡田が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	45
2.調査概要.....	46
1) 調査方法と経過.....	46
2) 基本層序.....	46
3) 検出遺構と出土遺物.....	48
3.まとめ.....	49

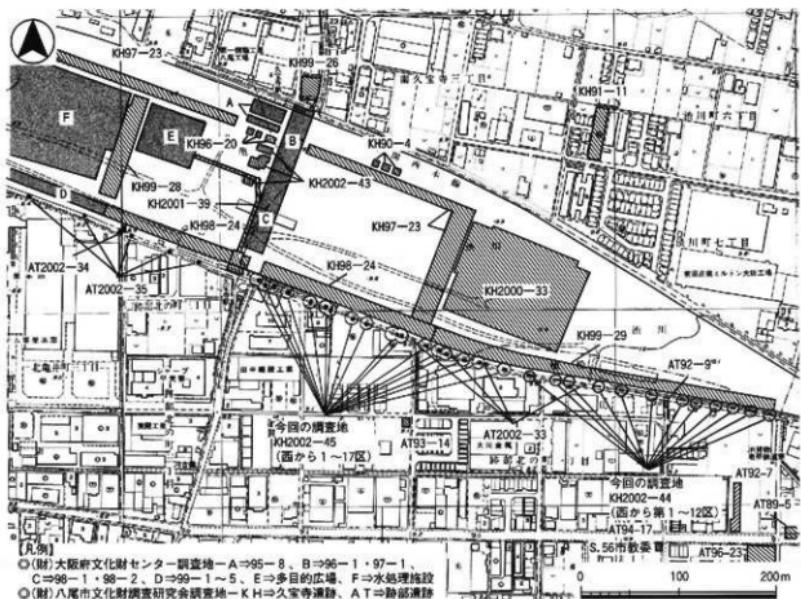
IV 久宝寺遺跡第44次調査(KH2002-44)

1. はじめに

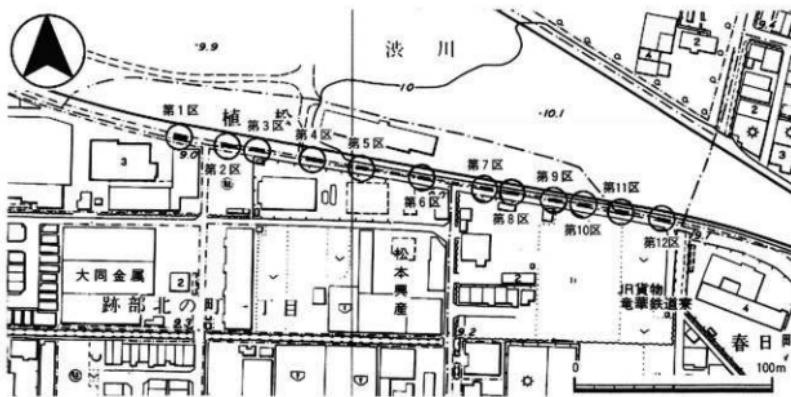
久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった古長瀬川左岸の低位沖積地にあたる縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡である。遺跡の推定範囲は、東西1.8km・南北1.3kmを測る。現在の行政区画では八尾市の北西部に位置し、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井・浜川町・跡部北の町がその範囲にあたる。当遺跡の周辺には、北東に佐堂遺跡・東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡・南に亀井遺跡・跡部遺跡・西に加美遺跡(大阪市)が隣接している。

今回の調査地の北側においては、昭和61年7月に八尾市が「旧国鉄竜華操車場跡地の基本構想」を発表し、それに伴う調査が昭和63年以降、(財)大阪府文化財調査研究センター、八尾市教育委員会、当調査研究会によって断続的に実施され、現在も(財)大阪府文化財調査研究センター、当調査研究会によって継続中である。それらの調査の結果、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての居住域や墓域、古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳・飛鳥時代の地震跡・奈良時代～平安時代までの居住域を構成する掘立柱建物・井戸・土坑・中世～近世にかけては水田・鳥畠・鬱溝といった生産域が見つかっている。

今回の調査地の北側では、平成11年9月～平成12年11月にかけて当研究会により久宝寺遺跡第



第1図 調査位置および周辺図(S=1/5000)



第2図 調査区設定図 (S=1/2500)

29次調査(KH99-29/第1図参照)が実施されている。その結果、弥生時代中期—土器棺墓、弥生時代後期～古墳時代前期—水田遺構、飛鳥・奈良時代—「渋川廃寺」に関連するとみられる井戸や創建瓦、平安時代～中世—生産関連遺構、近世～現代—島畑・水田・井戸といった遺構および遺物が複合的に検出されている。

2. 調査概要

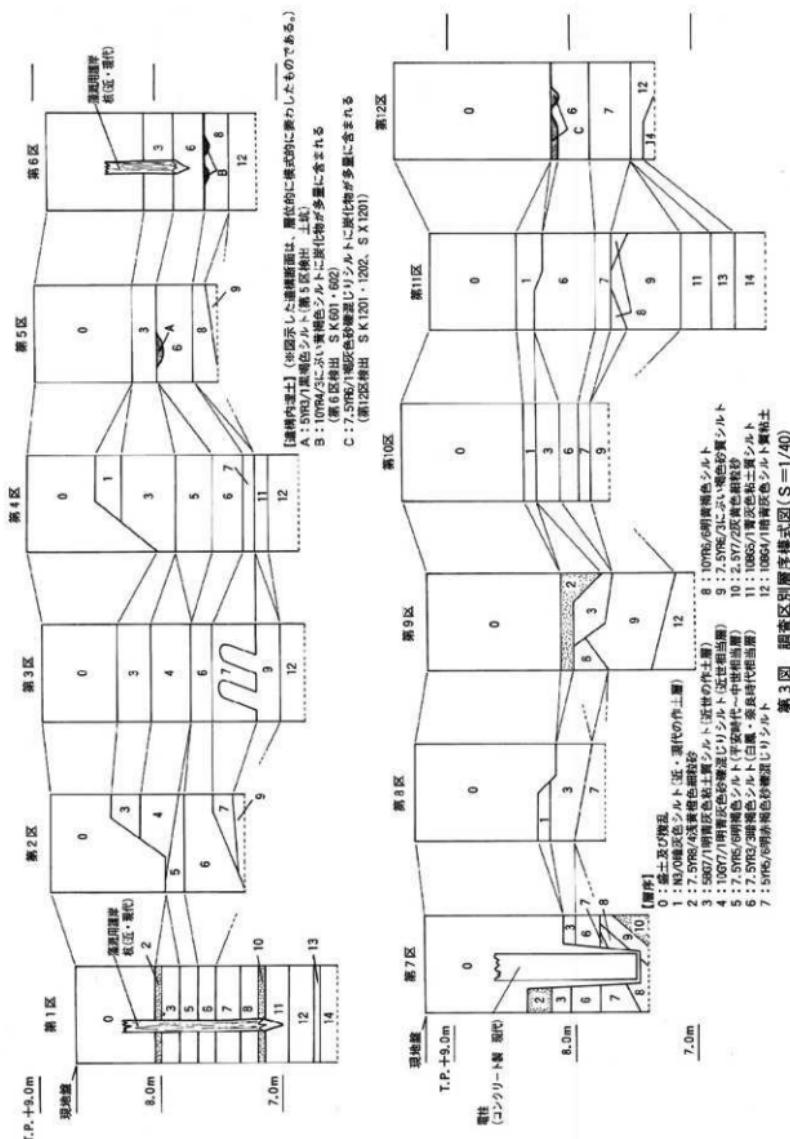
1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は電線共同溝敷設工事に伴うもので当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施する第44次調査にあたる。調査地点は既述の久宝寺遺跡第29次調査の南側に沿う東西約260mの範囲で、調査の対象となるのはその範囲内に計画された立坑12箇所の総面積約55m²を測る。各調査区の規模については、南北幅約1m・東西長1.5～3mで、深度は現地盤下1.5～2.5mを測る。

掘削については、現地盤から0.7～1.5m程を測る既存の道路築造に伴う盛土を排除した後、以下0.5～2m間の堆積層を重機と人力を併用し、遺構・遺物の検出に努めた。調査区は、西から第1～12区と呼称した。遺構番号について、数字の頭は調査区番号を使用した(例>第6区土坑の場合→S K601)。

2) 基本層序

本調査地の現況地盤の標高は東西間では地点によって多少の高低はあるが、西端にあたる第1区付近ではT.P.+8.7m前後、東端にあたる第12区付近ではT.P.+9.4m前後と、概ね東部では0.7m前後高くなっている。現地盤下0.7～1.5m前後は、現存する道路の造成盛土であるが、竜華操車場跡地寄りにあたる調査区の北側には、道路築造以前にあった東西に伸びる灌漑用水路の掘形が確認された。その掘形の埋め戻し埋土には、鉄道線路の枕木や線路脇の欄に用いられたと見られる角材をはじめ針金やコンクリートブロックといった旧国鉄関連の廃棄物のほか、旧水道管等が含まれていた。以下、これらを含む現代の盛土(第0層)を除き、全調査区で確認できた第1～12層について記述する。



- 第1層：N3/0暗灰色シルト。層厚0.1～0.2m。近・現代の作土層にあたる。
- 第2層：7.5YR8/4浅黄橙色細粒砂。層厚0.1～0.2m。酸化鉄分を含む。近世における洪水に起因するものと思われる。
- 第3層：5BG7/1明青灰色粘土質シルト。層厚0.1～0.4m。近世の陶磁器片を含む。人為的な攪拌が見られることから耕起による作土と思われる。第29次調査で検出されている島畠の作土に類似している。
- 第4層：10GY7/1明青灰色砂礫混じりシルト。層厚0.15～0.5m。近世の陶磁器片を含む。本層も第3層同様に該期の作土層と考えられ、島畠形成に伴う可能性が高い。
- 第5層：7.5YR5/6明褐色シルト。層厚0.1～0.4m。酸化鉄分の沈着が見られる。平安時代～中世にかけての土器片を僅かに含む。第29次調査では島畠の下層に残る作土層として捉えられている。
- 第6層：7.5YR3/3暗褐色シルト。第8区を除く全ての調査区で確認される。白鳳・奈良時代の土壤化層で、堅く締まっており、長期に亘り安定していたものと思われる。本層上面において、第5区では地層断面において、そして第12区では平面で平安時代～中世頃に比定される遺構を検出した。
- 第7層：5YR5/6明赤褐色砂礫混じりシルト。層厚0.1～0.4m。本層も第6層同様に堅く締まっており、全体的に酸化鉄分の沈着が著しい。第12区では、古墳時代後期(6世紀代)に比定される須恵器蓋杯の破片が出土した。
- 第8層：10YR6/6明黄褐色シルト。層厚0.1～0.2m。下部に酸化鉄分の沈着が見られる。第6区では本層上面において飛鳥・奈良時代頃に比定されると見られる遺構を検出した。
- 第9層：7.5YR6/3にぶい褐色砂質シルト。層厚0.2～0.6m。第9～11区にかけては比較的厚く堆積する水成層である。
- 第10層：2.5Y7/2灰黄色細粒砂。層厚0.2m以上。第1区と第7区に見られる氾濫性の水成層である。
- 第11層：10BG5/1青灰色粘土質シルト。層厚0.1～0.2m。植物遺体が若干含まれる。
- 第12層：10BG4/1暗青灰色シルト質粘土。層厚0.2m以上。植物遺体・炭化物が多量に含まれる。

3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第5・6・12区の3調査区内において飛鳥・奈良時代～中世にかけての遺構および遺物を検出した。以下、それらの成果について記述する。

【第5区】

北壁断面の観察の結果、第6層上面(T.P.+8.0m前後)から切り込まれることが確認できたが、平面の精査では検出できなかった。おそらく土坑になるものと思われる。確認できる法量は東西径0.28m、深さ0.06mを測る。埋土は黒褐色シルトで、遺物は出土しなかった。遺構の年代観としては上下層からの出土遺物から平安時代～中世頃に比定されるものと思われる。

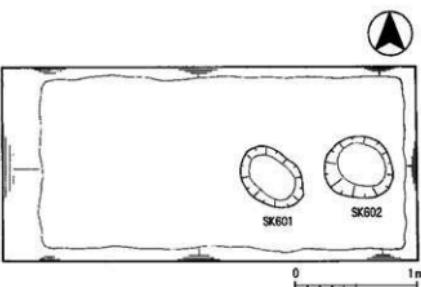
【第6区】

第8層上面(T.P.+7.6m前後)の調査区南東寄りにおいて、土坑2基 - S K 601・602を検出した。S K 601は長径0.29m・短径0.21mを測る北西～南東方向に長い楕円形を呈する。一方、その東側のS K 602は径0.28m前後を測るほぼ円形を呈する。双方ともに深さは0.08m前後を測り、掘

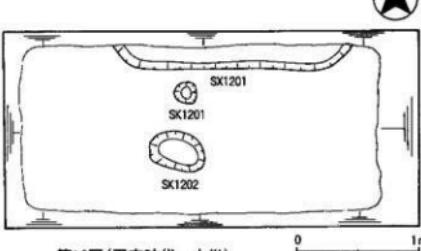
形の断面形状は皿状を呈する。また、埋土は双方とも、にぶい黄褐色シルトに炭化物が多量に含まれる。遺物はいずれからも出土しなかった。遺構の年代観としては上下層からの出土遺物を勘案して飛鳥～奈良時代頃と推定される。

【第12区】

第6層上面(T.P.+8.2m前後)で土坑2基-SK1201・1202、不明遺構1箇所-SX1201を検出した。SK1201は径0.17m、深さ0.06mで断面形状は皿形を呈する。SK1202は長径0.46m・短径0.33m、深さ0.08mを測る。平面は北西-南東方向に長い楕円形、断面形状は逆台形を呈する。そしてSX1201は、北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部の規模は、東西0.98m・南北0.1m前後・深さ0.1m前後を測る。埋土は全て褐灰色砂礫混じりシルトで炭化物が多量に含まれる。いずれの遺構からも遺物は出土しなかったが、年代観としては第5区で検出した遺構と同様、平安時代～中世頃のものと推定される。



第6区(飛鳥～奈良時代)



第12区(平安時代～中世)

第4図 第6区・第12区 検出遺構平面図(S=1/40)

3.まとめ

今回の調査では、全体的に遺構・遺物は希薄なものであった。近接する北側で実施された第29次の調査成果とレベル・層位的に照合すると、T.P.+7.0~8.0m間に飛鳥・奈良時代～近世までに相当する地層にあたることがわかる。そのなかで平安時代～中世にかけては耕作溝、そして近世に至っては島畑・水田・灌漑用井戸といった生産関連の遺構であることが窺える。また、下層のT.P.+7.0m以下においても、第29次調査をみると弥生時代後期～古墳時代にかけては畦畔状遺構や水田が検出されている。今回の調査では面的に捉えることができなかったが、地層で言うと第11・12層の粘土質シルトが該期の水田耕土となる可能性が高い。

参考文献

- 坪田・道・岡田・小川 2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書 一大阪竈華都市拠点地区竈華東西線4丁区に伴う』財団法人 八尾市文化財調査研究会報告74



第1区 北壁面



第4区 東壁面



第6区 造構検出状況(西から)



第11区 南壁面



第12区 造構検出状況(東から)



重機掘削状況



人力掘削状況



調査地測量風景

V 久宝寺遺跡第45次調査（K H2002-45）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市跡部北の町1・2丁目、大字渋川で行った、竜華東西線電線共同溝敷設工事(2工区)に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第45次(KH2002-45)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第243号 平成14年10月17日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成14年11月29日～12月20日(実働13日間)に、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は、71m²を測る。
1. 現地調査に参加した調査補助員は、荒川和哉・伊藤静江・岩沢玲子・岩本順子・垣内洋平・鈴木裕治・田島宣子・多田一美・都築聰子・横山妙子・若林久美子である。
1. 内業整理に参加した調査補助員は、上記のほか、飯塚直世・實樹婦美子である。
1. 本書作成にあたっては、遺物実測・拓本・トレースー飯塚・實樹、写真撮影・本文執筆・全体の構成ー成海がおこなった。

本　文　目　次

1.はじめに.....	51
2.調査概要.....	51
1) 調査の方法と経過.....	51
2) 検出遺構と出土遺物.....	51
3.まとめ.....	59

V 久宝寺遺跡第45次調査(KH2002-45)

1. はじめに

今回の調査は久宝寺遺跡第45次調査(略号KH2002-45)で、大阪府八尾市跡部北の町1・2丁目、大字渋川で行った竜華東西線電線共同溝敷設工事(2工区)に伴うものである。東隣には、同工事(1工区)に伴う久宝寺遺跡第44次調査地(KH2002-44)が位置している(本書 IV 久宝寺遺跡第44次調査-第1図参照)。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地は、操車場跡地内とその南側道路に位置しており、久宝寺遺跡と跡部遺跡にまたがっている。周辺には、東に跡部遺跡第33次調査地(AT2002-33)が近接して位置しており、西には久宝寺遺跡第39次調査地(KH2000-39)、跡部遺跡第34調査地(AT2002-34)・第35調査地(AT2002-35)、北に接して久宝寺遺跡第24次・第29次調査地(KH98-24・KH99-29)があり、跡部遺跡と久宝寺遺跡が混在している。

工事範囲は旧国鉄竜華操車場跡地の南に沿った道路の久宝寺駅前から東へ264m分である。このうち、ケーブルのジョイント部分や点検部分となる「電気樹・管理者樹」埋設部分の17か所が調査対象となった。調査の手順としては、基本的に西から進める予定であったが、工程が短く、調査終了後即座に工事に移行する必要に迫られたため、工程重視で調査を進めた。調査区の名称は、西から1区・2区・・・17区とした。掘削規模、調査日程等は第1表のとおりである。

掘削方法は、矢板立て込み法で、現地表下1.5m程度までは素掘りで掘削した後、矢板を立てて以下の掘削を続けるものである。

周辺のこれまでの調査結果から、おおむね現地表下1.0~1.3m付近のⅡ層・Ⅲ層上面に調査対象面のあることがわかつていたため、盛土・旧耕土を機械掘削した後、造構面の有無の確認を行いながら機械掘削・人力掘削を併用して調査を進めた。平面的な調査終了後は、再び機械掘削とし、工事による掘削終了時点まで立会い、記録保存に務めた。

2) 検出遺構と出土遺物

調査地の現地表面の高さは、T.P.+8.6~9.0mで、西が高く東が低い。また、南北でみれば、北側の操車場跡地部分は0.3m程度下がっている。盛土は0.3~0.5m程度なされているが、敷地境界より北には、旧水路やフェンスの基礎などがあり、敷地内には久宝寺遺跡第24次調査-5~8区・第29次調査-1区が位置しており、損傷を受けていた部分が多い。

表1 調査区一覧表

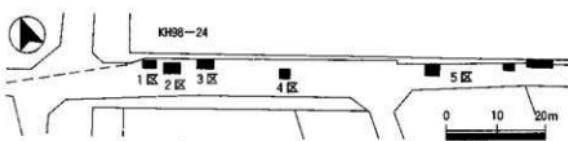
調査区	規 模(m)			調査日程
	東西	南北	深さ	
1区	2.5	1.5	1.7	20021129
2区	3.1	1.8	2.0	20021205
3区	3.5	2.0	2.5	20021129
4区	2.5	1.5	1.7	20021219
5区	3.5	1.9	2.3	20021206
6区	2.0	1.6	1.8	20021220
7区	4.0	1.8	2.6	20021209
8区	3.2	1.9	2.2	20021211
9区	2.0	1.5	1.9	20021219
10区	2.5	1.5	1.7	20021218
11区	3.1	1.9	2.1	20021212
12区	2.0	1.5	1.8	20021218
13区	2.7	1.5	2.0	20021202
14区	3.0	2.0	2.2	20021213
15区	2.0	1.5	1.8	20021217
16区	3.0	2.0	2.1	20021214
17区	2.0	1.5	1.8	20021217

全体的な層序は、盛土以下、おおむねⅠ～V層に分かれ、周辺の調査結果と同様の結果が得られた。Ⅰ層は作土で、2区・10区以外の調査区でみられた。西部の7区西半分までは暗オリーブ～黄褐色を呈する砂質シルトで、7区東半分以東ではグライ化しており、青灰～緑灰色の粘土質シルトである。Ⅱ層は床土にあたり、黄褐色系の砂混じり粘土質シルトである。東部では鉄分の沈着が顕著である。Ⅲ層は島畑の盛土で、黄褐色～褐色系の砂と粘土質シルト・砂質シルトのブロックからなる。西部の1～7区に見られることから、Ⅰ層は、西部は島畑作土、東部は水田の作土であることがわかる。Ⅳ層は6区以東で見られるもので、古墳時代中期～平安時代前半の遺構面を構成する地層である。マンガン・鉄分を多く含む褐色系の粘土質シルト～砂質シルトである。V層は久宝寺遺跡南部から跡部遺跡北東部にかけて基盤層をなす埋没河川で、少なくとも3種類(河川A・河川B・河川C)があることを確認した。

以下に各調査区を西部(1～5区)・中央部(6～12区)・東部(13～17区)の3グループに分けて特徴を記す。

・西部(1～5区)

西部の現地表面の標高はT.P.+9.0m前後を測る。西端の1～3区では、0.3m程度の現代の盛土以下に、操車場構築時に関連すると思われる整地・盛土がある。1区北西端には北東～南西方向に近代の陶管が埋設されていた。3区の北部は旧駅舎・プラットフォームの基礎、南部は公共下水道の管路・マンホールなどで最終面まで損傷をうけている。



第1図 1～5区設定図(S=1/1000)

層序

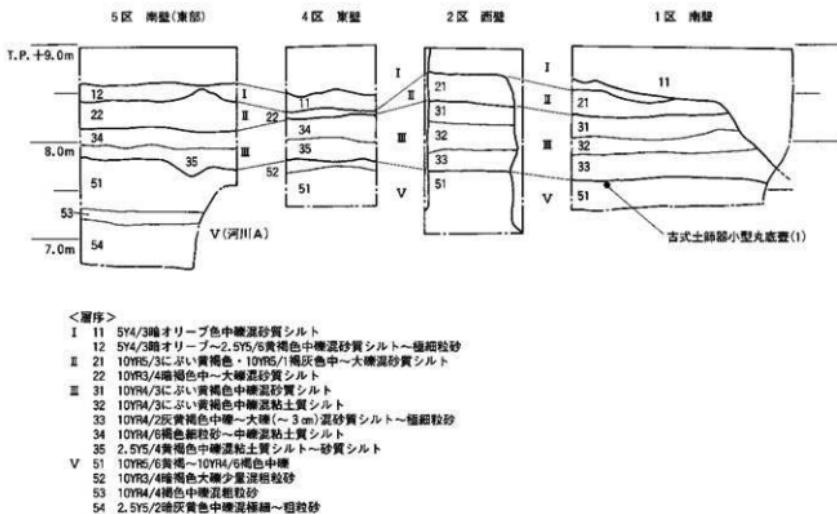
I層：旧耕土は2区には無かったが、削平されたのではなく、もとからなかったようである。

オリーブ系の砂質シルトからなり、畑(島畑)の作土と考えられる。I層上面の標高は、T.P.+8.4～8.6mを測る。

II層：2区ではII層が高く盛り上がっていたようで、道路状遺構の可能性がある。他の調査区では、旧耕土のベースを形成している。5区では、東端に幅0.5mにわたって0.15mの高まりが見られたが、盛土ではなく、削り出しているようである。II層上面の標高は、2区がT.P.+8.7mと高く、1区・3～5区ではT.P.+8.3～8.5mである。

III層：島畑盛土は2～3層に分かれ、厚さは1～4区が0.65mと厚く、5区では0.4～0.5mと薄くなる。下層のV層を主とした土砂を盛り上げて形成したもので、2区・3区-33層から、古式土師器小型壺(第9図-2・3)、同甕(4)、同高杯(5～7)、須恵器杯蓋(8)、土師器杯(9・10)等が出土している。III層上面の標高は西部がT.P.+8.4m、東部がT.P.+8.2mと東下がりとなっている。

V層：5区では厚さ1.2mまで確認できた。51層上部・52層は硬くしまっているが、51層下部は軟質で、5区では水平ラミナ(53・54層)が認められる(河川A)。1区51層から古式土師器小型丸底壺(第9図-1)が出土している。V層上面の標高はT.P.+7.6～7.9mで東が高い。



第2図 1～5区断面図(S=1/50)

出土遺物

小瀬丸底壺(第9図-1)は河川Aの最上層の51層から出土した。完存しているが鉄・マンガン等が付着しており、遺存状況は良いとはいえない。製作時からか二次的なものかは不明であるが、口縁端部は不ぞろいで、波状を呈している。上流から流され、水浸かりの状態が長期にわたって続いているものであろう。

島畠盛上からは小破片を含めて多量の土器類が出土している。その中でも比較的遺存状態の良いもの(第9図-2～10)を掲載した。小型丸底壺(1)と同様に古墳時代前期のものが多く、次いで平安時代前期、江戸時代以降のものである。内部に古墳時代前期までのものが含まれていることから、河川Aは古墳時代前期までは流れていること、島畠は埋没後河川Aの土砂を盛って構築されていることがわかる。

高杯脚柱状部(7)は、ヘラ先による沈線で、格子状の文様を描いている。施文方法は、まず、柱状部中位に水平な沈線を廻らせた後、その付近から下へ向かって、10数本の沈線を描いていく。この高杯は、柱状部内面の調整が須恵器の回転ヘラケズリのように行われており、時期は古墳時代中期(5世紀代)にまで下る可能性もある。

・中央部(6～12区)

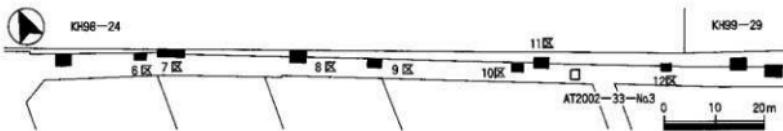
11区の南東5mには、A T 33-No 3 調査区が位置している。中央部の現地表面の標高は、T.P. +8.7～9.0mを測り、盛土の厚さは0.3～0.6m程度である。II層およびIII層の一部は7区東部で途切れ、I層の層相は東西で異なっていることは先に述べた。この地点が島畠の東端となり、ここより東は水田となる。

層序

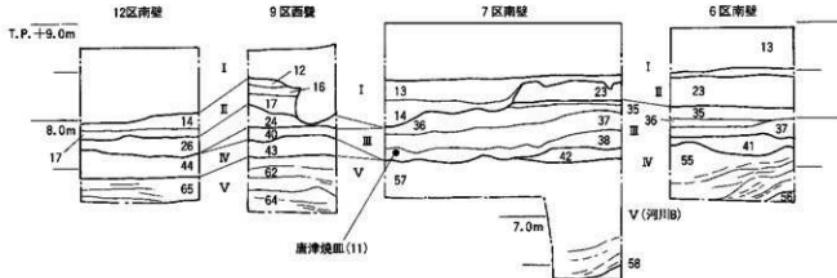
I層：旧耕土は西では島畑作土、東は暗青灰色系の粘土質シルトからなる水田作土となる。島畑作土の層厚は0.1m前後と薄いが、水田作土は最大層厚0.5mにもなり、7区東・9区・12区では複数枚堆積する。I層上面の標高はT.P.+8.0~8.5mで、東が低い。

II層：上面の標高は、西部の島畑部分ではT.P.+8.7~8.8m、東部の水田部分ではT.P.+7.6~8.2mと高低差がある。

III層：7区で厚さ0.6mを測るが、9区では0.1m程度となり、そこより東には認められない。7区38層からは唐津焼皿(第9図-11)が出土している。III層上面の標高はT.P.+7.8~8.3mで、東が低い。



第3図 6~12区設定図 ($S=1/1000$)



<解説>

- I 12 5Y4/3暗オリーブ～2.5Y5/6黄褐色中纏混砂質シルト～極細粒砂
- 13 5Y5/3灰オリーブ中纏混砂質シルト
- 14 5B6/1暗青灰色粗粒砂～中纏混粘土質シルト
- 15 5B6S/1青灰色中纏混砂質シルト
- 17 5B6S/1暗青灰色粘土質シルトと粗粒～中粒砂
- 21 10YR5/3～5/4黄褐色・10YR5/1褐灰色中～中纏混砂質シルト
- 22 10YR3/4暗褐色中纏混粘土質シルト
- 23 5Y4/3暗オリーブ～10Y4/1暗緑灰色(グライ化?)粘土質シルト混中纏
- III 35 2.5Y5/4黄褐色中纏混粘土質シルト～砂質シルト
- 36 2.5Y5/4黄褐色粗粒砂混粘土質シルト(中纏混少量含む)
- 37 10YR/6褐色粗粒砂～中纏混粘土質シルト
- 38 2.5Y5/3暗褐色粘土質シルト
- 40 2.5Y5/6暗褐色粘土質シルト・2.5Y6/1黄灰色粘土質シルト～シルト質粘土
- IV 41 10YR5/2暗褐色粗粒砂混シルト質粘土
- 42 10YR4/4褐色粘土質シルト混中粒砂
- 43 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト(上部)～極細粒砂(下部)
- 44 2.5Y4/3オリーブ褐色粗粒砂
- V 51 2.5Y6/6暗黄褐色粗粒砂・2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト・2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂の互層
- 52 2.5Y5/6暗灰色中～中粒砂
- 53 2.5Y4/6オリーブ褐色粗粒砂(上部)～中粒砂(下部)に2.5Y5/4黄褐色中～粗粒砂(粘土のブロック10cm～含む)
- 54 N6/0灰色粗粒砂一層
- 62 2.5Y5/6暗褐色・2.5Y7/1暗オリーブ灰色中～粗粒砂と2.5Y3/1暗オリーブ灰色細～粗粒砂混粘土質シルトの互層
- 64 5B6S/1青灰色粗粒砂・2.5Y5/6黄褐色粘土質シルト
- 65 2.5Y4/2暗灰灰色粘土質シルトと粗粒砂2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト混極粗粒砂
- 70 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土

第4図 6~12区断面図 ($S=1/50$)

IV層：次いで西部では見られなかったIV層古代遺構対応層に至るが、それに相当する遺構・遺物はなかった。IV層上面の標高はT.P.+7.6~7.8mである。

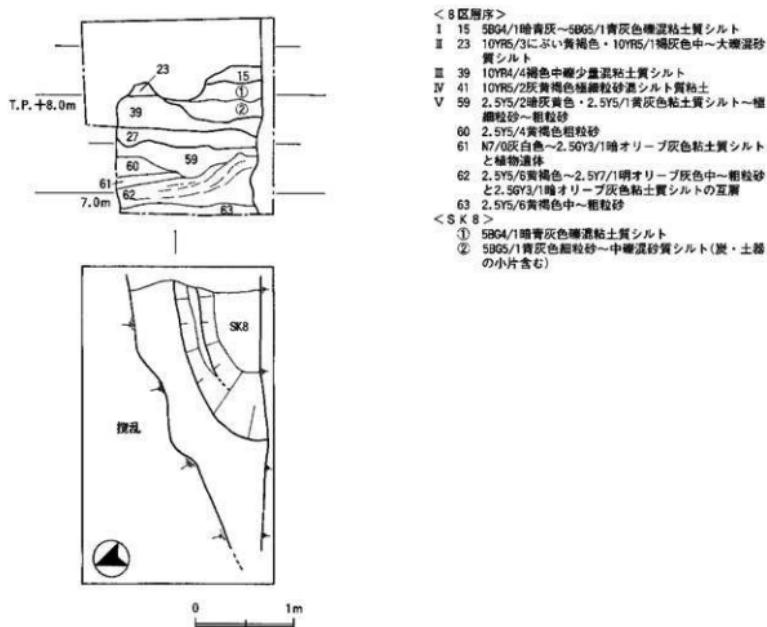
V層：粘土質シルト・細～粗粒砂からなる斜交ラミナが認められ、西部の1～4区までの堆積状況とは大きく異なっている(河川B)。7区では、深さ1.3mまで確認できた。V層上面の標高はT.P.+7.4~7.7mで、6・7区が最も高い。

検出遺構

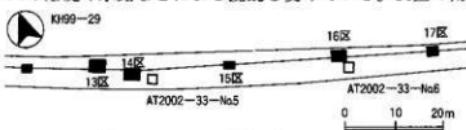
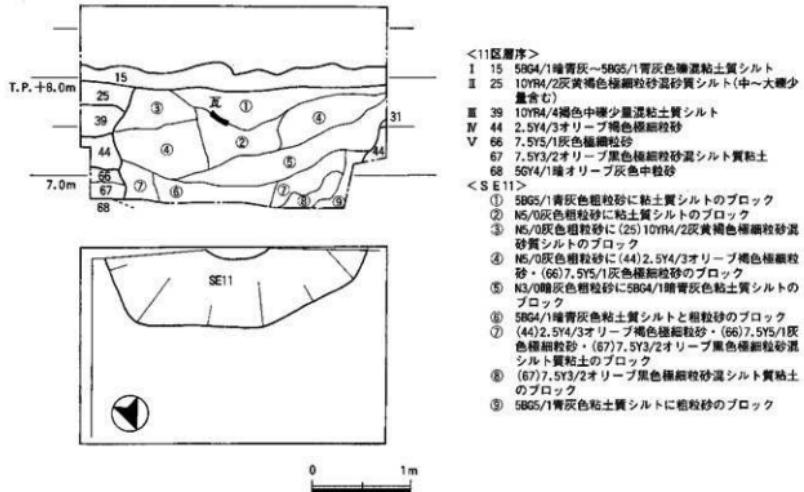
8区で土坑(SK8)、11区で井戸(SE11)を検出した。

土坑SK8

本来は23層上面(T.P.+8.15m)から切り込むものであるが、23層は近現代の溝や構築物などに損傷をうけているため、検出したのは39層上面である。調査区南東端に位置し、平面の形状は、東西1.6m・南北0.9mの範囲で北東～南西に丸く円弧を描く。北側の肩には2段の掘形が認められる。深さは1段目0.25m、2段目0.2mの0.45mを測る。底はおおむね平坦である。内部には①層暗青灰色疊混砂質シルト、②層青灰色細粒砂～中疊混砂質シルトが堆積しており、②層には土器・木炭の極小破片が含まれている。上坑と考えたが、島畑の南東端の可能性もあり、そうであれば、内部に堆積する①・②層は水田作土となる。



第5図 8区-SK8平面面図(S=1/50)



I層：近現代の擾乱のため、部分的にしか残っていない。I層上面の標高はT.P.+8.0m前後を測り、東ほど厚く枚数も増える。

II層：I層同様部分的にしか残っていない。上面の標高はT.P.+7.6~7.8mで、東へ下がる。

IV層：14~17区で見られる。16区西壁では、遺構の可能性のあるくぼみ(⑤層)を検出したが、平面的には確認できなかった。上面の標高はT.P.+7.5~7.6mと東が低い。

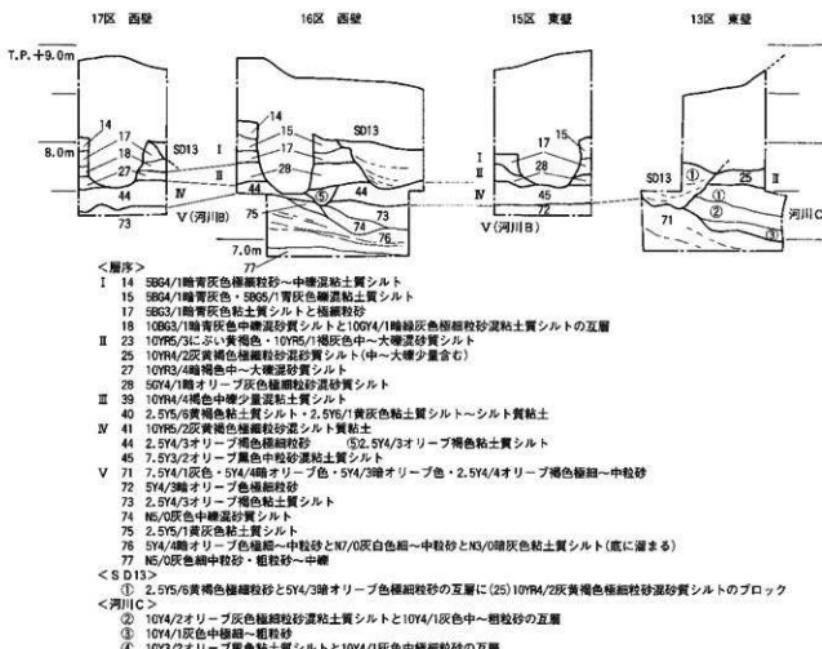
V層：粘土質シルト～砂質シルト～細粒砂～中疊からなるラミナが見られ、南東～北西の流路方向が想定できる(河川B)。AT33-Na6調査区では、この層まで掘り抜かれた井戸の痕跡を検出している。なお、13区の①～③層は、V層(河川B)を切って東西に伸びる別の河川流路の可能性があるが、明確にはできなかった(河川C)。

検出遺構

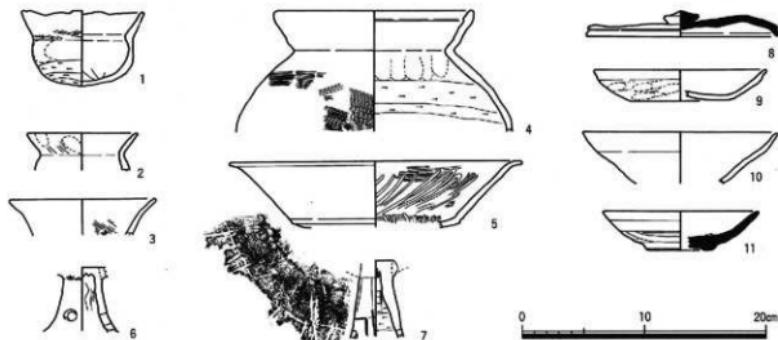
13・16・17区の北部で、14層を切って、東西方向に伸びる溝(SD13)を検出したが、平面では明らかにできなかった。本来の敷地境界の溝と考えられ、後に操車場建設の際に改変を受けた部分が多いが、13区では堆積状況が明らかにできた。

溝SD13

幅1.0m・深さ0.6m、断面の形状は逆台形を呈し、底は平坦である。埋土は黄褐色極細砂と暗オリーブ極細砂のラミナで、底に25・28層のブロックが転落している。



第8図 13~17区断面図(S=1/50)



第9図 出土遺物実測図 (S=1/4)

表2 出土遺物一覧表

番号	器種・部位	出土地点	法量(cm)	色調	残存	備考
1	古式土師器 小型丸底壺	1区 51層 河川A	口 径 12.0 最大径 8.2 器 高 6.1	5YR6/6褐色～10YR7/3に ぶい黄橙～10YR4/1褐色	完存	・二次的なものか口縁端部は 波状を呈する。体部には黒斑 あり
2	古式土師器 小型丸底壺 口縁・体部	2区 33層 鳥煙盛土	口 径 9.0 残存高 3.1	5YR6/6橙色	1/4	・体部片あるが接合できず
3	古式土師器 小型壺 口縁部	2区 33層 鳥煙盛土	口 径 12.0 残存高 3.0	7.5YR5/6明褐色	1/4	・二次焼成のためか口縁端部 に煤付着
4	古式土師器 布留式壺 口縁・体部	2区 33層 鳥煙盛土	口 径 15.8 最大径 22.6 器 高 10.0	10YR7/3にぶい黄橙色 剥離部分は10YR8/2白色	1/4	・内面体部のヘラケズリは強 い
5	古式土師器 高杯杯部	2区 33層 鳥煙盛土	口 径 24.0 残存高 5.4	5YR6/6橙色	1/4	・外面表皮の剥離甚だしい。 ・内面には放射状ヘラミガ キ。
6	古式土師器 高杯 脚柱状部	2区 33層 鳥煙盛土	残存高 5.3	7.5YR5/6明褐色	全周	・3孔の位置は均等ではな い。 ・鉄・マンガン等付着。
7	古式土師器 高杯 脚柱状部	2区 33層 鳥煙盛土	残存高 6.3	7.5YR7/6橙色	全周	・ヘラ描き沈線による格子文 ・内面のヘラケズリは回転状 に強く施されている。
8	須恵器 杯蓋 天井～口縁部	2区 33層 鳥煙盛土	口 径 15.7 器 高 2.1	N6/0灰～N7/0灰白色 釉は7.5Y4/3オリーブ 色	2/3	・天井部外面に重ね焼き痕、 自然釉、灰かぶり有り。 ・焼きひずみ。
9	土師器 杯 口縁～底部	2区 33層 鳥煙盛土	口 径 14.2 器 高 2.5	外表面は7.5YR5/6明褐色 内面は7.5YR4/1褐色	1/3	・体部には一次調整のケズリ・ 指揮さえが残る。
10	土師器 杯 口縁部	3区 33層 鳥煙盛土	口 径 16.0 残存高 4.2	2.5Y7/2灰黄～5YR8/3 淡橙色～5Y4/1灰色	1/4	・二次焼成のための色調変化 か？
11	唐津焼 皿 口縁～底部	7区 38層 鳥煙盛土	口 径 13.0 高台径 5.7 器 高 3.3	7.5YR7/4にぶい橙色 釉は7.5Y8/1灰白色	1/3	・二次焼成のためか口縁端部 に煤付着。見込みに胎止日の 痕跡あり。

3.まとめ

西部で検出した島畠・河川A・河川Bは、これまでの調査(98-1・98-2調査区・KH98-24・KH2001-39)でもすでに検出されているものである。河川A(KH98-24-NR31002)は古墳時代前期までの土器を含んでおり、埋没後の高まりには古墳時代後期の「七ツ門古墳」が構築され、古墳廃絶後は島畠として利用されていたことも明らかになっている。島畠を構成する盛土には、土器片や瓦片が含まれているが、7区では最下の38層から17世紀初頭の唐津焼皿(第9図-11)が出土していることから、島畠の構築が江戸時代前期以降であることがわかる。

河川B(KH1998-24-NR31003)は、その堆積状況から河川Aを切ることが確認できたが、この付近を境に島畠から水田へと代わっていることは、近世の土地利用を考える上で興味深い。

参考文献

- ・本間元衡他 1997『八尾市亀井所在久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う—』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第6集 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・原田昌則他 2001『久宝寺遺跡第24次調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削工事に伴う—』(財)八尾市文化財調査研究会報告68』(財)八尾市文化財調査研究会報告
- ・原田昌則他 2003『久宝寺遺跡第29次調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区の掘削工事に伴う—』(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会報告



5区西壁(下層)



6区東壁



8区土坑検出状況(西から)



11区井戸検出状況(北から)



16区南壁(上層)



16区南～西壁(下層)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしふんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく76
貴名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告26
調査名	I 跡部遺跡(第32次調査) II 泉音寺・人竹西遺跡(第2次調査) III 木の本遺跡(第10次調査) IV 久宝寺遺跡(第44次調査) V 久宝寺遺跡(第45次調査)
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	76
編集者名	I・IV 関田清、II 高萩千秋、III 西村公助、V 成海佳子
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市寺町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-91-4700
発行年月日	西暦2003年6月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あとべいせき 跡部遺跡 (第32次調査)	おおさかみやまちかわちよしきうちよしきの 跡部(あしづく)すこらまんなり 大阪府八尾市春日町1丁目13 番地(春日公園内)	27212	64	34度36分 51秒	135度35分 36秒	20011220 20020131	73	防火 水槽
がくおじ・おひねじ・せき 泉音寺・人竹西遺跡 (第2次調査)	おおさかみやまちかわちよしきうちよしきの 泉音寺(せんおんじ)と人竹西(ひとたけに) 大阪府八尾市春日町2丁目~ 人竹5丁目	27212	5	34度38分 15秒	135度38分 24秒	20020128 20020328	26	配水管 布設
きのものといせき 木の本遺跡 (第10次調査)	おおさかみやまちかわちよしきのとことうめ200E 木の本(きのもと) 大阪府八尾市木の本2丁目20 番地	27212	35	34度35分 54秒	135度35分 21秒	20030128 20030203	75	土地区 画整理
きゅうこううじせき 久宝寺遺跡 (第44次調査)	おおさかみやまちかわちよしきのとことうめ200E 久宝寺(くぼうじ) 大阪府八尾市春日町1丁目~路 北の町1丁目~大字波田	27212	23	34度36分 59秒	135度35分 33秒	20021126 ~ 20021213	55	共同講 収戻
きゅうこううじせき 久宝寺遺跡 (第45次調査)	おおさかみやまちかわちよしきのとことうめ200E 久宝寺(くぼうじ) 大阪府八尾市春日町1丁目~番 北の町1丁目~大字波田	27212	23	34度37分 07秒	135度35分 00秒	20021129 ~ 20021220	71	共同講 収戻

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
跡部遺跡 (第32次調査)	墓域	弥生時代中期	土器棺	大型鉢(横蓋)・ 大甕(棺身)・壺・石器(石 瓶・石臼)	弥生時代中期の土器棺 は、方形周溝墓に伴う 可能性が高い。
	集落	古墳時代前期	柱穴・土坑・溝	壺・甕・小型鉢	
泉音寺・人竹西 遺跡 (第2次調査)	集落	一	一	一	
木の本遺跡 (第10次調査)	集落	平安時代	井戸・柱穴・土坑・溝	土師器・黒色上器・瓦器	井戸や柱穴を検出した ことから、平安時代の 集落があったことが判 明した。
久宝寺遺跡 (第44次調査)	集落	飛鳥・奈良時代	土坑	土師器・須恵器	
		平安時代~中世	土坑・不明遺構	土師器・瓦器	
久宝寺遺跡 (第45次調査)	集落	古墳時代前期	河川	古式土師器	
		江戸時代	井戸・土坑・鳥糞	唐津焼	
		近代	溝		

財団法人八尾市文化財調査研究会報告76

- I 跡 部 遺 跡 (第32次調査)
- II 楽音寺・大竹西遺跡 (第2次調査)
- III 木 の 本 遺 跡 (第10次調査)
- IV 久 宝 寺 遺 跡 (第44次調査)
- V 久 宝 寺 遺 跡 (第45次調査)

発 行 平成15年6月
編 集 財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX (0729) 94-4700

印 刷 株式会社近畿印刷センター
表 紙 レザック66 <260Kg>
本 文 ニューエイジ <70Kg>
図 版 ニューエイジ <70Kg>

